

《シリーズ対談：教養教育とその周辺》

大学で「人間する」デザイン⁽¹⁾ — 高等教育の場としての大学のあり方を考える —

佐々木 康成[†], 田中 富士美[‡], 曾我 千春[§], 櫻井 貴志^{††}, 菊池 嘉晃^{‡‡}

1 はじめに

本誌は、本学人文学部が設置された2016年度に創刊され、2025年度でちょうど10年目を迎えた。この「シリーズ対談：教養教育とその周辺」は、創刊時の本誌編集委員会企画として始められ、今回で11回目となる。本稿では、前巻での教養教育科目の授業におけるオンデマンド教材⁽²⁾を起こしたのにつづいて、より多様な内容やゲストを迎えた形での教養教育とその周辺を伝える場とするため、この数年間にわたって本学各学部のみドルマネジメント⁽³⁾を担ってきた学部長ら⁽⁴⁾をゲストとして招いた。特に、この4年間の管理面、教育面、研究面について振り返り、これまでの本シリーズに対する意見や気づき、さらには今後の本学の高等教育に関する展望について、座談形式で数時間語り合った⁽⁵⁾内容を起こして編集した。

筆者らの立場からこの数年間を通して多くの活動を円滑に行ってこられたのは、各学部等を預かるミドルとしての単一の機能だけでなく、「学部長会」と称して公私にわたってミドルマネジメントにおける問題や課題を互いに詳らかにし共有し合ってきたことも功を奏している。このようにさまざまな局面で「共闘」し、互いを尊重し合ってきた仲間としての認識と関係性を

を維持してきた筆者らミドルマネジメント層が、本学さらには高等教育についてどのように考えているかを議論していく。

本座談会では、まず冒頭でこれまでの本対談シリーズの内容を全10回のタイトル毎に解説して振り返るところから始まり、常識と創造性の中で「人間する」とはどういうことかについて述べられた⁽⁶⁾。続いて、学部長としての多忙な経年を振り返る具体的な議論へと移った。本稿を通じて、ミドルマネジメント層の実践的な視点から見た教養教育の現在と、本学の高等教育の場としてのあり方について議論してみたいと思う。

田中(田) 一連の対談シリーズで気になったキーワードなのですが、なんていうか、話の動かし方がお上手だったんだと思うんですけど、大変深い内容ですね。

曾我(曾) 話の内容が高度やなー。

佐々木(佐) (笑) まずはここまで、全10回の本誌対談シリーズ⁽⁷⁾での活動をざっとお話ししました。皆さんには、この数年間のミドルとしての、管理職としての、2年ないし4年間をそれぞれやってこられたので、その振り返りをしてくださるといいかなと思います。

† yasaki@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

‡ tfujimi@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University.)

§ chiharu@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Economics, Kanazawa Seiryu University)

†† sakurai@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Human Sciences, Kanazawa Seiryu University)

‡‡ kikuchi@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

特に、各学部の状況や構成に言及しながらお願いします。

2 ミドルとしての各学部の見え方

2.1 経済学部——似て非なる分野の構成——

佐) では、いつもの順番通り⁽⁸⁾、経済学部長、どうですか？

曾) 経済学部の管理面については、教員採用が難しかった点が挙げられます。毎年度転出者がいらっしゃいます。他の大学にキャリアアップや研究環境を求めて出られることは、本学がその土台・お手伝いできていてという点で評価できると思います。ただし、転出者を埋めるべき応募者が少なくなっている。また、応募して下さっても、本学の経済学部の方針や学生対応の面で齟齬が生じている方などがいらっしゃって、なかなか採用にまでいかない、採用になっても本学に合わないという事例もありました。さらに将来大学教員となる経済学系の大学院生が少なくなっているということも言われています。このような状況のなかで経済学部も科目の調整などを行ってより幅広い学問分野での採用を試みてはどうかと思っています。この人、力になってくれるっていうか、一緒に仕事したいなと思う人との出会いを期待しています。

学部の構成という点では、この4年間で経済学科と経営学科の雰囲気は明確に異なってきたと感じます。経済学科の先生は自主性を重んじる傾向が強くなっており、研究者肌の方が多く所属しています。他方、経営学科は強い団結性が特徴的だと思います。今年度に入り、経営学科の学部化に向けて（一部反対の意見もあるが）、強いまとまりをもって話が進んでいる感があります。各学科の雰囲気は所属する人材によって大きく変化するように見受けられます。特に経営学科には企業出身者が多く、社会や会社のあり方を直接的に示す傾向があると感じています。一

方、経済学科には学者肌の方が多い印象があります。このように経済学部は、学科ごとに学問の性質や教員の特徴が大きく異なっているように感じています。

佐) 地域システム学科⁽⁹⁾として外に出てから、なおその傾向が強くなった感じかもですよ。

曾) 強くなった。

佐) だから、まだ観光分野が経営学科の中にあつたときやそのもうちょっと前の人たちがいたころの経営学科だと、ボクはそういうふうにはあんまり感じてなくて、むしろ経済学科よりは教養の考え方に近い人たちが多かったように感じていました。

曾) 経営学科の場合は、以前は、より学問的・教養的なアプローチが重視されていた印象があります。いま佐々木先生が言われたように、観光系が経営学科にあつたころは教養的な部分もありました。現在は、企業との連携や実務的な取り組みを重視する傾向が強まっているように感じますね。

佐) それはあるかもしれないですね。それと、曾我先生が一般の教員でいたときとミドルの立場になったときとでは、かなり学科内や学部内での立ち位置や考え方なんかご自身で変わったということじゃないかな（笑）。

曾) それもあるかもしれませんね（笑）。

佐) さっきの、教員の応募が少ない話は、他の分野では逆にわりと人がいて、40歳くらいになってもポスドクやってる人もいるくらい分野もたくさんありますね。でも、経済系の分野はそうじゃないっていうことは、多分、今に始まったことじゃないんじゃないかしら。ならば、もうそこは割り切ってマス教育でやる科目がたくさんになってもいいじゃないのとボクは思うんです。

曾) そうですよ。同じようにおっしゃる先生も実際おられます。

佐) だからこそ、教養教育科目をあれだけ取

らせるっていうことでもOK⁽¹⁰⁾なんじゃないかなって思う。ちょっと昔の経済学部は52単位も教養の単位があったわけですからね。それを40単位にはした⁽¹¹⁾ものの、実際には、そのうちの「基礎専門ゼミナールⅠ, Ⅱ」⁽¹²⁾とかキャリア教育科目群や教職科目群から専門教育科目群へ移した科目もあるので、結果的に教養の一般科目としてはそんなに減ってないとも言える。だから、マス教育的な回し方をしてよい科目は専門科目でもわりとあっても本当はいいと思うんですよ。その点で言えば、オンラインで使い回しするな、とかいうような議論が学部内ででてくるっていうのがね、信じられないです(笑)。

曾) 学問ですから、普遍的なものっていうのはあると考えますからね。

菊池(菊) オンデマンドで、自分の授業で、使い回しちゃいけないっていう論調の？

佐) そう言う人がいるようなんですよ。毎年、変えなさい、って言う人が...

菊) それ、中身にも依るし、逆に変えてはいけない感じのもあると思うんですけど。

田) 普遍的なものがね、アップデートしなくていいものはあるはず。

佐) ボクなんか対面の授業であっても、冗談言うタイミングでさえ一緒なのがありますよ(笑)。

櫻井(櫻) かなり再現性高いんですね(笑)。

佐) そうそう。だからね、ここではこの例、こっちではこの冗談、ここではこの話、みたいにね、なってます。

曾) うちも比較的そうだな、再現性は高いな。

佐) そのほうがね、受講生たちは分かってくれるからね。もし違うのをやったときの分からなさ加減がね、またちょっと怖いからっていうのもあるんです。だから、具体例も、冗談も、一緒(笑)。なにより、そうしておく、毎回のコメントタイム⁽¹³⁾に書かれてくる内容も経年で比較できますからね。

曾) 分野によって変化が必要な部分があれば、そうでない部分もある。それぞれの専門性を尊重しつつ、全体を一律に扱うのは難しいと考えますね。

それと、給与や業務負担に関する議論もあるが、分野の特性を踏まえた対応が求められると思う。分野やテーマの内容によって、授業の質や量はずいぶん変わるはずですから。—中略—

佐) だからそこまで言うなら、ご自身の授業のそのあり方を受講生の規模やクラス数に依存して見つめ直すということもいつもしてまわすかって言いたいですね。同じ科目であってもクラスが違えば違う授業になるでしょうし、なにより分野や内容ややり方によって授業の中身はぜんぜん変わってきて当然だと思うし、そもそもボクら教育やらせてもらってるんだから、もっと内発的な動機づけで臨んだ方がいいとおもうんですよ⁽¹⁴⁾。それにそのほうが楽しいしやりがいあるしい。

田) 分野、領域によって必要なら海外の大学や国内の大学のコンテンツで受講できるものがあってもいいかもしれないですね。人文学部の英語科教育法に、海外の大学のCELTA(英語教育Certificate)を付加価値として選択で組んではどうかという案もありますよ。

2.2 本当の人間科学——「人間」の理解と「人間」の教育——

佐) では次、人間科学部長。

櫻) まず管理面。そうですね、人間科学部設立当初はスポーツ学科とこども学科で行き来するのがデザインされていたんです。なので、2年生のフィールド活動は、実はこどもとスポーツを分けずに「フィールド基礎」という授業をやっていたんです。でも、それが分化して行って、今はもう完全に2年生の活動もバラバラになって、人間科学部で何するのっていうところが希薄になっていて、各先生方は学部の先生ではなく、学科の先生と

しての認識が強いですよ。いい意味で言うと、色の違う先生が同じ学部にいるので、いろんな議論ができるっていう良さもあるんですけど、わるく言うと、各学科固有の問題は各学科の先生方でしか解決できないので、関係してくれるな、というような風土も出来上がってきているかなというところがあります。例えばこども学科に関して言うと、教員採用を目指している学生さんたちが多く来て、その学生さんたちの要望に社会の状況がマッチしてきて、希望すれば小学校の先生になれるとか、幼稚園、保育園の先生になれるという率が高くなって、学生募集という意味ではあまり苦勞されないし、逆にどこでライン引いて次は定員よりもどれだけ上回らずに入学者を確保できるかっていうその難しさが出てきているのがここ数年の問題です。ここについてはやっぱり先生方も自信を持たれているので、あまり、ヤイヤイ言わないように気をつけていたところなんです。なので、学科固有の問題については、学科の先生方で解決をしてください。その代わりに、学部として何か判断しなきゃいけないことがあれば、学部長として意見を言わせていただきますよ、というところで、学科長とは連携とりながらやってきた。

そういう中で言うと、とはいえ人間科学部なんだから人間科学部として何か学んでほしいものを提示しようというところで、カリキュラム編成するとき一年生に「人間科学の基礎理論」という科目を第1クォーターに両学科で共通でやって、3回ずつスポーツとこどもの先生が自分たちの研究でどんなことをやっているのか、それは人間理解についてとか、人間の発育発達ですとか、物事の考え方っていうのをやっている。実はこれ、教養教育でやっている「教養ゼミナール」とほぼ近いものをやっているんですが、基礎ゼミをやはり学部でしっかりと持ちたいという

ころもあったので、そのような形にすることを先生方に理解してもらえるようにとは思っていました。学部長として、管理という意味で言うと、組織のあり方をもう一回考えましょう、人間科学部でどんなことをやるのかななどを考えていただいていた期間になるのかなと。

人事に関しては、全然そんなところは気にせず、欠員が出て、公募を出せば幸い何名かの先生が来ていただいて、こちらの意に沿うような先生方に着任いただけるような形でいけたのではないかなと思っています。一緒に長くやる先生方が多いという前提のもと、やはりその先生方を理解しようという動きは、「教育」という分野に携わっているがゆえか無意識で働く学部学科なので、そういった苦勞はあまりないのかなというところなんです。

ただちょっと仲良くなりすぎていて、管理という意味で言うと、学生の管理はもうちょっとしっかりすべきかなって...。特に外に出る学部なので、金沢星稜大学っていう名前を背負って出ているスポーツ学科、こども学科の学生たちの振る舞いが本当にこれでもいいのかなっていうところを考えていく時期なのかなって個人的には思っています。例えば、学内で結構張り紙されてるじゃないですか。研究棟だから静かにしなさいとか、コピー機は教員しか使っちゃダメですよ、っていうのは、暗に人間科学部に対する注意喚起という気はしてて、そこは個人的には気になって、教授会とかでも卒業研究の時期、コピー機、学生の論文を印刷することがないように、みたいなことを注意しなければいけないぐらいの、まあ親密さの表れなのかもしれないですけど、ちょっと手厚過ぎるかなっていうところを感じているのはありますね。教員と学生ですね。頼られるとやってしまうっていう。

佐) 経済学部とかでも, ベったり直す先生もたまにはいるかもしれないけど, 割的にはそうでもないのかしら。数年前まで経営学科におられたある先生がね, 卒業研究報告書とか結構早く仕上げさせるっていう話を聞いて, どうしてるのって聞いたら, だいぶ早くからいろいろ活動させてたんだって。しかも, 2年次までの基礎ゼミではそうじゃないんだけど, 専門ゼミでは卒業するまではかなり厳しい先生としてやってますよっておっしゃっててね。でもその先生の研究室っていうのも学生がいるのを拝見してたんだけど, 中ではかなり厳しくやっておられたようなんです。だからあんな風に早く9月, 10月には出来上がってたんだなあと思いました。

曾) 元会社員でもあられたっていうのもあるかなあ。

櫻) システムエンジニア, SEだったから, やっぱ納期管理とか, その辺はね。

曾) あの先生のゼミ生は意識の高い学生が多く, 優秀な学生が集まっていたという印象があります。企業出身の先生でしたので, ゼミ運営や管理, 社会人基礎力のような人材育成は学生にとって魅力的だったと思います。また, 経営学科のゼミは, 実務的な内容が多く, 学生にとって楽しく学べる場となっているため, 他のゼミも含めて人気が高い傾向があります。

佐) まあ分かりやすいですもんね。それにいつも言いますが, コンテンツがリッチに見えます。

曾) 分かりやすい。

佐) この大学の学生たちにとってみたら「分かりやすい」っていうのは重要な要素だと思いますね。学問がどうのこうのよりも, さっきのその抽象と具体の話で言うと, その具体的などころが多い学科よね。

菊) この大学の学生ってね, たぶんそうだと思います。

佐) そうそう, だからそういうレベル感とか卑近性とかっていうのも大切ですね。逆に言うと, 学生たちをこの大学から社会に出したときに, 社会の人たちがうまく使ってくれるかどうかっていうのもあると思うんですよ。批判的なことばかり言うような人間を出しても, あんた働いてないじゃんって思われたら終わりだからね。ちゃんと具体的なことを知ってる, やったことある, あるいはそこに興味を持つ人の方がね, 使いやすいと思うんですよ。

曾) 変な理屈ばかり言うようなのだと会社としてもねえ。

佐) うん, 会社にしても, これってなんとかじゃないですよ, とかって言われても, これはこれなんだからここから始めろ, っていうことって少なからずありますからね。だから, 前におられた生産管理の先生と研究室でお話したとき, やっぱり実際のモノがあって, そのモノをきちんと見つめるってことができるかどうか, モノを扱うってことを旨としておられたのが印象的でした。ゼミでも実際のモノを学生たちに提示してワークをさせておられたのがとても記憶に残ってます。この大学の学生たちにとってはかなり大事なことなんじゃないかなとボクは思いますね。だから理論とか抽象とかよりもむしろ具体側が必要で, 例えば, 理論系であっても, シミュレーションのようなのをやってくれる先生がいたらいいのになっていう話をね, 経済学科のある先生ともずっとしてるんですよ。具体的なもの, あるいは考えやモデルを元に一回やってみる, シミュレーションでもいいからやってみるっていうね。なんかそういう経験はやらせる意味がある。そういう意味でのPBL⁽¹⁵⁾はいいと思うんです。

曾) どちらかというところ, スポーツはそういうところが配当科目に入ってるんですよ。

も、こども学科ってすぐその教員養成にかかわる科目をスタートしなければならないので、人間理解が足りないのに人間教育しようとしちゃうと、このことが学生自身が教師になったときに学生本人が一番しんどいだろうと僕は思っていて…。先生としての魅力じゃなくて、自分の理解できない子たちがやってくることをどう解釈して何していいかっていうことがわかんないと、多分、職についてから気づいたらしんどいだろうなと感じます。早い段階で「人ってなにか」っていうところを知ってもらふ必要性があるんじゃないかと思って、この科目を立ててもらった。

佐) 「人間科学部」ですからね、やっぱり。そういうのがあるっていうことをスポーツ学科もこども学科も先生方がどこまで共有しているかとか、実際にどこまでご自身で考えたことがあるかとか、何かそういうのは結局教育や研究に出てくるんじゃないかなと思いますね。一方で、組織としてこうあった方がいいっていうのも学部の場合はあった方がいいですよ。それがDP⁽¹⁶⁾になるわけですからね。

櫻) でもありがたいなと思うのは、担当される先生が、この授業に合わせた形に多少アレンジしていただいて、話をするっていう手間を嫌がらないでアジャストしてくれるんです。

佐) そうはいつでも担当者のメンバ選びは重要ななあというふうに思いますが、どうですか。

櫻) これも両学科の教務部会のメンバーが主になって、今年度の担当を決めてもらうという形になっています。こちらからオーダーを出しているわけではないんですが、科目の特性とか、いろいろな学科の中での先生方の担当数も含めて担当していただいていたら、綺麗に並んでいるなというのがずっと続いているという状況なんです。

2.3 「国際」の本質的な意味——脱中心化に向けて——

佐) では次に、人文学部長お願いします。2年間先に部長をされた田中先生が話された後に、人文の歴史を追って、今の最近の話として菊池先生に行ったほうがいいかなと思います。まずは振り返り。

田) 人文学部は志高くスタートさせていただいて、2016年にあの素晴らしい人員構成でスタートして、飛行の高度を上げていきました。EMI⁽¹⁷⁾の状況で、専門科目も専攻していて、留学生も、地元の学生も全部交わるという理想で始まりました。ところが、地域にそれが100%適うかという非常に難しかったこともありますね。EMIを完全に実行することがどこの大学でも非常に難しい。難関大学でも非常に苦心していらっしゃる。EMIの学会とか行くと、本当に皆さんいろいろな問題提起をなさっています。英語で科目のすべてを教授することがすべて学生のためになっているのかという、運用していく中での現場での現実の中で、歴代の学部長も悩んでいらした。難しくなっていったのかなと思います。これが学科分割への一因につながるんですけど、やはりEMIも一種看板にしていた分、ここは教員の特性も鑑みて英語で教える科目を中心にもつ英語学・言語学の専門性をもつ学科、比較文化の学問を日本語でしっかり学ぶ学科に分けるべきではないだろうか…。特にコロナ禍を挟み、全国の国際系の学部が受難の時期というのもありましたが、このまま続けると、この綺麗に飛び立った機体は低空飛行を続けてしまうのではという危機感が国際交流センター⁽¹⁸⁾長をしていたころにあったのです。2019年をピークに、だんだん低空飛行気味になっていって、コロナ禍が始まることで留学が全然叶わないっていうので、本当に暗黒の真っ暗な状態でした。それが終わった後も復活し

ない。まわりの国公立大も同じように苦しんでいるから歩留まりが読めない。学生の募集に苦勞する。ここでもう何かしろと言われたらやっぱり学科を分けるってことしかそのときのベストではなくて、国際文化学科の良さはそれぞれの今の教員ラインナップでいうと学術面をもっと皆さんの母語でちゃんと学生に伝えるっていう学科にしてもらおう、それから、国際英語学科はもともと皆さん英語話者なので英語で授業のできる人たちが揃っているから、こちらにEMIをしっかり残すということで、英語と文化に分けるといって、これは皆さんに説明してきて、機体をタッチアンドゴー⁽¹⁹⁾させるような気持ちでいました。

今年もそのような傾向が出ていますが、共通テスト利用など、県内の国公立への進学層が、金沢大や富山大の次に志望してくれるため、その層で年明けの一般選抜に留まってもらおう、傾向が違う両学科、どちらも全員留学という極めて特徴的な国際系の学部が金沢にある、というので行こうと思ったのがこの学科分割でした。なので、いろいろ思いはあって、人文学部を作ったときの、理念は残しつつ運営をしていこうというふうになっています。学科を分けて一番大変な時に菊池先生にバトンタッチして非常にご苦勞をかけているんですが、そういった苦心がすごくありました。学部長と副学長の兼務が決まったところからもうそれが始まったので、もう4年前の今頃ですね。そこから届出で行けるって分かった瞬間からも皆さんにもご協力いただいて、いまに至っています。

いつも思っているんですけど、国際文化とか国際英語とか国際って名前がついていますが、でも実際、「国際」っていう言葉を私は好むかという、実は好んでいません(笑)。それをうまく翻訳する言葉が日本語にないからで、国際英語っていう概念があるんですけども、それが国際って無理やり訳したらそ

うなるだけなんです。本当はさっき冒頭で紹介いただいたこの対談シリーズによく出てきた「脱中心化」であったり、「脱ローカル化」であったりというところに帰着するので、本当はそういうことを主張していたいのです。「国際」って1980年代にKokusaikaと言われてた、日本独特のinternationalizationで、何か「西洋」にむけた特別のものであったものから逃奔できないのではと感じます。特に「脱中心慣れ」ができない場所ではそのようなことになるのではと思います。その国際交流をすることが何かのステータスみたいになっていたり、国際交流イベントをやりました、あるいは極端な例では留学生をホームステイに迎え入れました、だから民生委員や赤十字みたいな表札をくれみたいな話を聞いたことがあります。

人文学部の学生は留学が大きく功を奏して、脱中心化、脱ローカル化をした姿になっています。大都市圏の帰国子女や留学生を多く抱える大学では、普通に日本人の学生が英語をしゃべるのが怖いとかじゃなくて、そこにいる学生を何語であれ普通に受け入れる。何もしなくてもそんなことを教えなくてもやる。そういう環境をG館⁽²⁰⁾で作れたらというふうにずっと思ってきました。留学についても、「はい、行きなさい」と背中を押す程度で本来はよいのだと思います。現地で経験してきたことを、帰国後に専門科目の中で一緒に振り返り、それをどう学びにつなげられるのかを考える。そうした科目を文化領域も英語領域も含めて体系的に用意しています。

こうしたことから、従来型の「国際」という枠組みは、もう手放したいのです。このメッセージがどれほど学生や教員に伝わっているかは分かりませんが、少なくとも私は、これから本学が進める「国際」が、古い枠組みに戻らないものであってほしいと強く願っています。

佐) 「国際」という言葉について、これ今、例えば同志社大学でも調べてみるとね、「国際」という言葉を使ってないんですよ。グローバルコミュニケーション学部っていうのと、グローバル地域文化学部っていうのがあるんですよ。グローバル地域文化学部ができたときは、グローバルと地域とどっちやねん(笑)っていう話で盛り上がったことありましたが、でもこれなんか、おそらく意味としては、今、田中先生がおっしゃったのと通じるようなことだと思うんですよ。しかも今おっしゃったように、やっぱりその「国際」の中には、「脱中心化」ということが非常に強く理念としてあるはずなんです。それをちゃんと全学的に理解してもらおうということは必要だと思ってますね。

田) そうなんです。

佐) だからホントはもっと適切な言葉があればいいんだけどね。例えばSTEAM-D⁽²¹⁾(Seiryō Transformative Education for Arts and Math by DX & Designの略称)なんか、別にSTEAM-Dじゃなくていいんです。でも何かその総合的に文理を超えて学ぶ、さらには変革的に教育するというを表す言葉がね、総合とか変革とかっていうような言葉じゃ足りなくてね。だからSTEAM-Dと造語して少しみんなで考え続ける余白と曖昧さを埋め込んで使っているというわけなんですよ。実際transformativeというところは何かというと、今おっしゃった「国際」と同様に、脱中心化であったり総合的であったり、あるいは「教養力⁽²²⁾」っていうことだったりするわけですよ。さっき櫻井先生がおっしゃった人間科学部だって総合的な人間のあり方を知るっていうことを自分で知るかどうか重要なのであって、そういうのをもうちょっと高等教育の文脈で議論した方がいいんだらうなというふうに思いますね。

田) もうなんなら「脱中心化学科」でもよかつ

たぐらいでしょうか。

佐) あ、そうですね(笑)。化けてほしいですもんね(笑)。Chemistryの要素も含めてね。

田) 本当にそうなんです。でも、国際英語っていう言葉の文字の並びは確かに鉄板なんですよ。国際文化もそうです。学科名称の命名では、相当学問的にも議論されています。大学全体の「国際化」「グローバル化」については、大学なんだから、何かファシリテートするような種をまいておくのはいいけれど、何かを強制的にやらせて、さあ見てこい、っていうような、こういう狭い窓から見るような国際化じゃないので、そのことを国際担当副学長としては思っていました。

佐) 前にも研究室で話してたときに言ったと思いますが、内地留学、つまり国内での大学間の行き来でも十分じゃなかったっていうね。要は、場所を変える、周りの人を変える、っていうだけでも、かなりの「変革」が人間には生じると思うんですよ。

3 教養教育とその周辺

3.1 メタ認知と「人間する」こと

佐) 先週ね、西田幾多郎記念哲学館⁽²³⁾へね、恥ずかしながらこの歳になって初めて行きました(笑)。そのときの展示の中に、井戸の模型があってね、「わたしが井戸を見ています。井戸がわたしを見ています。」⁽²⁴⁾とあったんですよ。ふうーん、と思って次のパネルに行くと、窓の模型があったからね、そうか、窓からあなたは見ているけど向こうからあなたを見ている人もいる、というような意味のことを言いたいのかなあ、と思いながら、あ、そうだよなと。今さっきの「脱中心化」の話も、こっちから狭い窓を見てるけど、その狭い窓を実は向こうから見てる人がいるかもしれないということに思いを馳せれるかどうかっていうことが何か一番重要ですよ。人間の話でも、自分は人間なんだっ

て思っただけじゃなくて、人間と思われるためにどういうことをするかっていうことが大切なわけじゃないですか。いつもそういう両面性を自分の中で意識するっていうことさえできていれば、どの学科にいても、どの学部にも、どの分野にいても、うちの星稜のこの良さが出るんじゃないかなあと思うんです。

菊) メタ認知、ですよ。

田) そういうメタ認知を「これがメタ認知だよ」と学生に気づかせることは私たちの仕事の一部でもあるかもしれない。それをなんかこう強制的に枠組みを作って、これをやったらこれが見えてくる、っていうのではない気がします。

佐) そうそう、そもそも、メタ認知を教えようなんていうおこがましいことだけは考えない方がいいっていうね(笑)。そこがね、難しい。結局、「国際」もそうなんだわ。決して国際化してっていうふうになるもんじゃない。自発的に、さっき言ったような両面性を持ちつつ、そういう風になっていく、っていうことが重要だと思うから、これまでの対談シリーズのところでも「人間する」っていう言葉を使ってね。「人間する」っていうことがどういうことかっていうことを常に考えてないとあかんよなってね。

菊) やっぱり実体験なんですよ、メタ認知って。実際に自分が見られている自分っていうか、自分を見ている相手と実際に交わることで、メタ認知できるようになる。そういう経験をたくさんすることでメタ認知は育つものだから、やっぱり留学っていうのは、一つのそういう経験ですね。人文学部の場合、留学の中で否応なくメタ認知を求められる状況っていうのをある程度は与えられるわけですね。

佐) ね、その鏡なり窓をもう否応なしに設定されるんでね。

菊) 理論や理屈でメタ認知とはなんぞやっていうことは絶対理解できないから、そういう経験の場を、機会を与えるっていうことが必要なんですよ。

佐) ボクら教師がね、これこれを教えるっていうのは、メタ認知はおろかもう他のことであってもね、やっぱりボクはおこがましいなって思ったりするんですよ。自ら学んだことにしか実質的な価値はないんで…。

田) そうですね。

佐) 教えられてっていうのも、自分が学ぼうとして教えられたことは身につくかもしれないけど、passiveに教えられるっていうことへの定着っていうのはものすごく低いんだよね。

3.2 リメディアル教育の落とし穴

菊) 私は本学に着任して3年目ですけど、この大学の学力が下の方の学生っていうのは、あまりにも基礎的な知識が少なすぎて驚きます。私も授業で基礎的なことを質問するんですけど、例えば、中国の最後の王朝って何ですか、日本と戦争したでしょって。そういうことも知らない学生もいるんですよ。そうすると、近現代史、近現代の国際関係を教えようとしても、もう入口で止まっちゃうんですよ。

佐) 「殷周春秋戦国秦漢新漢...⁽²⁵⁾」は言えても、最後の清が一体何だったのかってことはわかってないっていうね。

菊) しかも清は漢民族の王朝じゃない、民族が交代してるわけです。中国はね。そんなこと言ったら朝鮮半島の王朝なんか誰も知らない。ほかにも、この前の授業で学生のほとんどが「先史時代」を知らなかった。だから、高校までに教科書で教わっているような知識自体も頭に入っていない学生が多いので、基本的な思考をするためのピースみたいなものがあまりに欠けているんじゃないかと。

佐) そうか、だからボクら、「心理学」とか「哲

学」だとかの分野の教員は、ある意味、学生にとっては初習（初修）なので、担当教員自身がすでに学生が知らないってことを前提で授業やってるんですよね。だからあんまり今のようなことは感じなくて、むしろ日本語のところで苦労してるなっていうふうに思えるけど…。これね、前に人文学部におられたキリスト教学の先生もおっしゃってたんですよ、やっぱり世界史を全然知らないからすごく教えるに困ってね。ボクね、むしろね、この大学の学生たちにはね、そこが無いものとして（それに選抜試験でも科目として今は課していないからね）やっていった方がいいんじゃないかと思ってます。

菊) 最近そう感じます。そこからまず教えないとね。

佐) 知らせる、って言うとイイかもって思ってます。知ってる学生にしてみるともう1回知ることになるし、知らない学生にしてみたら全く知らないところから0が1になるわけだし、それから、ちょっと聞いたことあるけどそれがなんだかわからない、「殷周春秋戦国…」しか知らなくて最後の清はなんだっていうのが結びつかない人にとってみれば、あ、そういうことだったのかとわかる。だから、それぞれの人たちのレベルのところによって刺さるように何か喋る、特にパラフレーズしながらしゃべるしかないんじゃないかなー。

菊) 比較文化系（人文学部国際文化学科）の授業って、やっぱり世界史を知らないと学びにくい。文化というものは世界史と密接に関連している部分がありますから。一年生の必修科目で世界史をやったほうがいいのかなんて思ったりしますね。

佐) 国際文化学科と違って特にそれあってもいいんじゃないかとね。

菊) だから、国際文化学科の教員の間では、学生に教養教育科目を取りなさいっていう先

生は少なくないですよ、私もそうですが。それもあって、1年次で従来は事実上必修化していたEAP⁽²⁶⁾を（国際文化学科の学生の場合は必修の部分の少し）減らす形にしたわけですよ。最近の学生は地理もよく知らない。国の位置を全然知らない。地図もあまり見たことないようなんです。

佐) 地理の話は、前におられた英語ネイティブの先生がずっと昔から首をかしげておられてね。みんな世界地理を知らないんだって。

櫻) 日本ですらわからないと思います。福島って九州にありますよねっていう学生もいましたから。「福」だけ合ってるよって（笑）。

菊) 沖縄の人が本州の県を全然知らないっていうのは、沖縄に行って聞かされたけど、本州にいながらそういう感じですか。本来、そういう一定の知識のピースがあった上で、いろいろ思考する、思考してほしいというところがあるんだけど。やっぱり創造するには、何か芸術作品を創るにも基本的な素材がないことには、もう仕方がないんで、その基本的な素材がないことが関心の幅の薄さにもつながっているわけですよ。いろんなピースがあれば、そこにちょっと引っかかることで関心っていうのはどんどん広がって深まっていくんだけど、それがあまりないんですよね。だから、新入生アンケートをとると、留学ができるというのがトップには来るんだけど、そこに対してすごく本格的に関心を持っている層と、全然そうでもないような消極的な層もね、結構いる。

佐) だからといってねえ、ボクは、リメディアルとか、初年次教育とかっていうのに力を入れるのにはね、とても疑問があるんです。というのも、例えば、1年次での図書館ツアーなんかね、よく3、4年次生からも聞かれることあるんだけど、図書館があるのは知ってるけど、今はその手続きとかどんなサービスがあるのとかって、もう全部忘

れてますってね。自分が文献を調べようという動機や目的意識が出てきて初めてその意味がわかってきたり覚えていくようになったりする。だから、例えば、リファレンスの機能とかも「そんなあるよ、文献取り寄せできるんだよ」って言ったら「知らなかったです」って言うわけです。でも、知らないからといって、それを1年次からやろうとするとな、その場面で必要性や役に立つかって思えてないわけだから、今の学生たちが物事を定着させていくわけがないのでねって思います。ボくらでさえ実際、自分事にならない限り、なんないでしょ。例えば、こういうミドルの立場に立って会議とかで議論して、初めてDPってそういうことかっていうことをやっと考えるようになったんであってね。それを学生にさ、もうリメディアルだの初年次教育だのってね、知識や方法を教えようとしても、ひどい話だとボクは思います。無責任な話と思うんです。教員や大学側のやったという責任だけ果たした感しか残らないって思います。

菊) 企業で言うと、OJT⁽²⁷⁾って言いますね。前職の新聞社での話をすると、新聞記者としてのスキルってというのは、もう完全に昔はOJTだったんですよ。たった2週間だけ基本的な研修をして、いきなり現場へ行かされて、最初は警察取材が多いんですけど、警察に毎日張り付いて、全然わからないところからやって、それでもいきなり自分の記事が大学卒業して2～3週間後に出ちゃったりするんですよ。自分の原稿はめっちゃめっちゃ直されるけれども、自分で見様見真似で取材して書いて原稿を直されて、その繰り返しをやりながら、ようやく、どういう視点で取材すればいいか、どういうふうにまとめればいいのか、半年から1年くらいすると分かってきます。取材と記事をまとめるのは違うスキルが必要で、難しいんですよ。いろいろ雑多な

情報、整理されていない情報を取材してまとめるわけですから。

佐) どの視点で書くかとか、どんなカテゴリで編集するかとかね、そんなだっけきつと経験していろいろやっていかないと、それを最初に教えたって多分意味がないですよ。

菊) そうなんですよ。それで新聞記者の教育は、最初は型にはめて書くところから始まります。警察の事件事故に関係する原稿は型通りに書かなきゃいけないので、そこから入るんですよ。コラムなんて新人記者にはとても書けないです。そんなものは相当経験を積んでからじゃないと。だから、型通りの記事を書くところから徐々に応用して発展していくんですけども、そういう過程を経ながら初めて記者としてのやりがいとか面白さということがわかってくるわけですよ。社会での様々な関係性とか、情報伝達がどういうふうに行われているのかっていうのが体験としてわかってくるわけです。そもそも(報道される)情報って形作られた、コード化されたものとして発信されているわけですが、もともとの生の情報って本当にぐちゃぐちゃな状態ですべてばらまかれている。砂浜の中から石を集めるような作業なんですよ。ただ一応、警察とか行政とか、この辺にいい石が転がっていきそうだなっていう塊はあるんですけども。研究における情報の収集と分析、考察してアウトプットする作業にも、似ている部分があると思います。

佐) いや、すごくよくわかります。だから初修でやるからボクらは余計にそういうのやらざるを得なかったっていうのがあるので、自分なりの工夫も入れて基礎的なことも含めてやろうとするわけだけど、なまじ英語とかもう初等中等で6年以上もやってきたような科目だと、どうしてもね。だって社会科なんて小学校からずっとやってるし、地理だって地図使って小3からずっとやってるのに、

なんで知らんねんって話だからね。そうするとやっぱりなんで知らんねんってことばかりについて初等中等教育に押し付けようとしちゃうけど、いや、むしろ、ボクらのところで高等教育として今お前が必要だと思うんだったら、お前が必要な基礎教育やれ、っていうふうにボクは思います。ある意味、OJTならぬOn-Lecture Training（講義を受けながらその場で必要なスキルも訓練する）とかIn-Lecture Learning（講義内学習）と言うようなのがあってもいいですよ。あるいは、製造業でのJust-In-Time（必要なものを必要な時に必要な量だけ）っていうのになぞらえて、Just-in-Time Learning（その知識が必要になった瞬間に教える）っていうスタンスで大学の教員もいてればいいんじゃないかしら…。

田) いやほんとにそうです。それとね、別の観点から、私、昔英語のレメディアルのクラスをある大学で持ったことがあるんですけど、もう大人である学生に対し失礼だと思いましたよ。それが本人たちのcognitiveな面⁽²⁸⁾にどう響いたんだろうかと…。中学3年生レベルの文法や単語を繰り返し行うのです。それは英語の単語を覚えたかもしれないし、文法を復習することができたかもしれませんが、学生たちはどれだけのプライドが傷つけられるだろうかっていうことを非常に感じながら、それをなんかうまく表現できないかなって思っていました。ちょうどそのころ海外の学会に行ったとき、自分が興味のあるセッションがあって、日本の小学校英語教育のちょうど始まるくらいの頃だったので、その調査をして発表された先生がいたんです。その時に出ていた教材を見せてもらいました。当時は小学5年生のスタートだったので、11歳ですよ。11歳の子に対してですね、カードでappleとかdogとあって、そういうものを子どもに見せる、とすれば幼

稚園の子どもに見せるようなものが教材になっているっていうのを見た海外の研究者が、それcognitive的にどうなのか、11歳の子がこれをやって、自分たちはこれで何を学ぶのか認識しているか。それで学ぶというよりは、それは確かにappleって覚えるかもしれないけれど、それを最初に見て、この子たちはどう思うんだってところについてはどう思う、みたいなところを言われて、日本人として頭痛いと思って聞いていたんですけど、そういう学ぶっていう、学習するっていうことと、人が人らしく生きていくっていうことがつながらない状況をそこで作っているって非常に思ったので、特に大学生で、18歳、19歳で入ってきた時に、さあ大学で勉強するぞって思った時に、「これ？」っていうことは避けたいことだと思いました。「これを知らない次がわからないんだ」っていうことを知らしめるということが目的というところは理解できますが、この学生たちは確かに英語は縁がないかもしれないけれどサッカーや野球では大学を背負って活躍するわけですよ。

佐) 結局のところ、さっきも言ったように、大学側や担当者側の「教えた」という完了形の責任だけ果たした感を表すにとどまってしまう感じがします。リメディアルや基礎教育って、それこそその実質化、という観点から議論される方がイイと考えますね。それともう一つ、学生には、あなたの学びや成長にボくら教員がとても関心があるっていうことを強く伝えることも必要かなあと思ってます。

3.3 学びと身体性——観察、取材、分析、編集、共有、総合——

佐) 昔ね、前の大学で実験実習のレポートを見るのが毎週の仕事っていう時期がありました。ボク、わりとちゃんと見て添削しちゃう方だったんですよ。で、何年か経ってくる

と、次第に「いやこれこんな細かいことオレがやってんと、なんかこういうのを教える基礎科目作りませんか」って一度提案したことがあったんです。そしたらある先生が、「いや佐々木先生、それね、無駄ですよ。みんなです。その細かいのやらないと意味がないんです。」って言われたの。そのときはあんまり理解できてなかったんだけど、ここまでの議論してて、今のリメディアルにしても、さっきの地理や世界史の話にしても、みんなです。ちょっとずつやらないと、一つの科目で基礎的なことばかりをやっても意味がないですって言うようなことだったんですね。ボクはその時まだずいぶん若かったからかなあ、でもオレがその基礎の仕事やったらちょっとはレポートもマシになるとちゃうかなあとか、ちょっとおこがましいことを思ってたんですよ（笑）。まだ今より20ぐらい若かったからね。ところがやっぱりね、今さっきの話もそうだけど、それぞれの時や状況に必要なことをそれぞれにそれぞれの先生がやった方が学生たちにとっては絶対意味のあるものになるんですよ。それが割と教養ゼミナールを複数の先生たちでの担当にした一つの理由でもあるんです。すなわち、担当教員の専門分野周辺を「使って」ゼミの中で基礎的なことも専門的なことも必要に応じて学ばせるっていうね。なので、いわゆる基礎的な要素はほぼプログラムに最初から入れてなかったんです。図書館ツアーやりたい人はそれぞれでやってって言うふうにしてただけで、もうなんなら今の共通タスク⁽²⁹⁾でさえもわざわざやりたくないぐらいなんです。だってすでにやってるからね、例えばボクのゼミではね。教養力を培う課題としてすでにわりと課してるんです。同様に、共通タスクに相当する課題を課しておられる先生にしてみれば、共通タスクを課してしまうと学生にはかなり負担になると思うような先生もおられるわけで

す。でもね、相当な課題を課さない先生もいるようなので、その凸凹さえなくなればイイなと思ってる共通タスクでもあります。

ボクいつも思うんですよ、カリキュラムって全部で124単位もあるんだから、絶対に学生は成長するってね。そのどれだけの単位数でね、書かせてないか、書かせてるか、というのがあるんじゃないかな、と。例えばすべての科目で2000字書かせたら、単純計算でも2,000字×60科目として120,000字ですよ（笑）。卒論で20ページとかしょぼいこと言うてなくても、十分学びになると思うんです。ボクは声を大にして言いたいんです。皆さんもっと各担当科目で書く課題を課してってね。

櫻) さっき菊池先生が言われた記者の話。奇しくもスポーツ学科の2年生はフィールド活動の中で個別で分かれて行う4つと、一つは2年生全員でやるプログラムの5つで構成していて、全員にスポーツ新聞に書かせているんです。これは一年生の「基礎ゼミナール」の時に大学生の学び方とって、まとめるとか書くとか聞くとかプレゼンするとかってやってるんで、そのトータルが新聞だぞって。一年前に習ったことを自分の興味関心に照らして伝える。伝える材料は自分の興味あるものを自分で調べてくる。各グループで紙面を分割して、これ面白そうだから大きめで、これちっちゃくいくけど担当紙面ね、など紙面割まで考えて、グループで新聞を作りなさいってやると、模造紙みたいなものがあるわけじゃないんで、パワポをA3サイズに設定して、記事のところだけを、うまく載せていくとかって、それはICTを使う技術だぞって言いながらやったり、WordとかExcelとかで見出しをバラバラに作って、全部を貼り付けてやってもいいしって言うようなやり方でやると、結構学生たちは考えるんですよ。グループごとに全然違う色調、色

合い、あとは言葉の使い方とか出てくるんですけど、いいなと思ったのは、最後やった後に、新聞作りは大変でしたかって聞くと、大変だったって答えるんです。7割8割の子は。でも楽しかったですかって聞いたら、楽しかったってまた7割8割。っていうことは、課題の設定水準としては一番面白かったのかなと思って。全然協力しない子は大変だと面白くなかったに反応し、これが1割ぐらいいるんです。一年生で学んだことをちゃんと使って書きましたか、意識しましたかというのと、やっぱり6割7割は強く反応してくる。だからこういうコンテンツがその学びにとって面白くて、なんでこれに興味持ったのってやると、次は専門のところに行くのかなと思ったんですけど、そういうやりとりをどこかここかできていると、学生たちも今言われているように、学ぶことに対しての敷居が下がって、学ぶことが楽しくっていうふうになっていくのかなと。押し付けちゃうと多分ダメなんですよね。

佐) ボク、そういうのを「教養ゼミナール」の7回⁽³⁰⁾の中でやることにしています。最後にはもちろん各人のレポートなんだけど、そこへ行くまでは、各グループの中でも共有スライドで作らせてやっています。例えば⁽³¹⁾、この学内にある設備や製品や空間についての不満を探しに行かせます。どっかの椅子がガタガタするとか、エレベータの表示がおかしいとか、冷房が効いてないとか、いろいろ見つけてくるわけです。材料を観察させて、まさに取材の後、そのグループの中でどれが議論に必要なということを考えながら自分の班の中で一つ共有のパワポを作る。さっきの新聞に相当しますね。んで、今度はグループ間でジグソー法で説明に行かせて、各人が自班の情報を他班にも共有できる。その後、その学内のクレームを一人でまとめるっていう期末課題のレポート作成作業になります。これっ

てやっぱり、自分で見つけに行く、っていうことがさっきの櫻井先生のお話と同様に大切なあってね。なにか担当者がトップダウンに特定の問題を具体的に下ろしてやるんじゃないなくて、ざっくり「不満」なるものを自分で探してね、って。もちろんすぐにはそのモードになんてなんないから、ゼミの前半3、4回は、いろいろ自分で何かおもしろいものを見つけてプレゼンで報告してみんなと議論するっていう練習もしておきます。自分が気になるものを日常生活から持ってくるようにっていうある種のフィールドワークです。例えば、こんなメガネでもいいし、どっかの自販機でもいいし、空の風景でもいいし、人のおもしろい行動でもいいし、どっかに引っかかっている傘でもいいし、要は写真撮ってきて、それがなんでそうなってるか説明しようっていう1分弱の簡単なプレゼンと議論とをさせるわけです。そういう見回目、つまりは観察するっていう目をまず作って、注意をキチンと向けさせるようにして、それから取材させる。そしてみんなで論議して推論するっていうクセをつけさせて、材料を整理する。最後に受講生たち一人一人の報告書を書かせる。だからボクの中では、共通シラバスに書かれていることは身体を動かす中で具現化していると思ってるんです。でも、端から見たらね、あそこのゼミってなんかおもしろい写真撮って来て見てるだけ、みたいな風に見えるかもしれないですけどね(笑)。

菊) なるほど。この大学の学生って、やっぱり生身の世界で実際にさまざまなものに触れてほしいなと思います。その体験を通して、身体を動かしながら考えるということですね。

佐) こういうふうにやろう、ああいうふうにやろうって、学生たちが言ってるだけでは、多分ね、意味がないからね。

田) 私の担当科目にも今そのような感じで、メディアイングリッシュを今年から担当していて、メディアの解釈は過去に担当された先生方が、新聞、SNS、テレビなどいろいろ取り上げられましたけど、私はテレビに特化して、今アメリカのABCニュースの解説をしていってます。ABCの看板ニュース番組のニュースをみているわけですが、キャスターワークとリポーターワークに分かれています。それで、中間課題ではペアでキャスターとレポーターにロールを分けて5分間の番組を作ることにしました。学生たちに、キャスターワークとリポーターワーク、つまり、調べて、原稿を書いて、取材して、撮影して、録音・録画して、編集するという流れでコンテンツを完成させます。原稿の書き方もインストラクションを作り、それでやります。そういうの本当に乗りますよね、うちの学生ね。なんかね、めちゃくちゃ乗って、しかも編集なんて本当に上手で。火曜日にその課題の授業があったんですけど、原稿書き上げたのをこっちでチェックして、じゃあこれでいいよってなったら、それを持ってどっかロケ行ってらっしゃいって。次週は仕上りのニュースリポートの上映会して、応援コメントを皆で入れる。意気揚々と仕上げた内容に拍手でした。

3.4 ツールのユーザー化——科目「で」教えることの効用——

田) 今おっしゃってたようなことで思いついたんですけど、やっぱり、英語教育だから、言語教育だからそうなんですけどね、実際、ユーザー化するっていうか、そのことかな。だから、いわゆる運用ですよ。ユーザーになるということ。

菊) レポートの題材は身近なところから探させるんですか？

田) 何でも好きなこと、例えば、国際問題を取り上げたい学生は今のガザで起こっている

ことが気になって、それをいっぱいサーチして原稿書くとか、隅田川の花火見たいなと思ったら、そのいろんな画像を見つけてきて、情報収集するとか、また熊の出没や、環境問題、AIの教育への問題など、いろんなテーマが広く出てきました。

佐) そうそう、だからこの対談シリーズの中でも何度か言ってるんですけど、ある科目「を」教えるんじゃないで、ある科目「で」何かを教える、あるいは学ばせるんですよ。自分の分野の何か科目を教えるってなると、これボクおこがましくてできませんってなる。心理学⁽³²⁾を教えるって言ってもそんなの全部は知らないわけだし(笑)。「を」教えるってなると、多くの場合、知識になっちゃったり伝達になっちゃったりするじゃないですか。だから学生たちが別に望んでないことも叩き込むみたいなことになるんでね。もちろんそういうのが必要な科目もありますよ。でもそうじゃなくて、心理学「で」ボクが考えていることを知ってとか、ボクが求めていることを考えて書いてとか、そういうふうになんて心理学的な考え方とか見方を身につけてくれればいいんでね。ネットで様々なチャンネルから十分情報が得られる時代、高等教育の教員が生き残れる一つの考えられうる価値観なんじゃないかなあと思ってます。いかにボクらはボクらを語れるか、ということにつながるように思います。心理学「を」教えるってなると、やっぱりちょっとそれは違うなっていうね。科目「で」教える。それがボク、このシリーズの中で結構一貫して主張していることなんですよね。今おっしゃったこともそうですよね。その点で言えば、学びは起こるものでなく起こすものであるとも言えるのかなあって最近思ったりもしています。

櫻) そうですね。うちの学生のスイッチって今言われているようなことのような気がしていて、そこのスイッチを何もしなくても押せ

る学生と、何かを準備してあげないと押せない子がいて、その比率がだいぶ年によって違ってきているのかなって思います。その辺のさじ加減がわかるのが実は教員なので、我々も多分対象を見て、同じ内容でも教え方変えたりとかっていうのを無意識でやっていると思うんですよね。そのあたりは、うちの大学の強みだと思ってるんですよ。でもそれを認識しているかという、そんなに強く認識しなくて、各先生がいろいろと工夫されて。総括してパッと聞いてみると、結構似てることやってますよね、同じ問題意識でやってますよねっていうのが多いのかなっていうのは、今ちょっと先生方の話を聞いてすごく思いました。

佐) いつものこのメンバでの飲み会の二次会とかで櫻井先生がよくお話しされる教育や方法の話⁽³³⁾とか聞いてても、いわゆるPBLっぽいんだけど、実際にはそれを今先生がおっしゃったみたいに、その場にいるその学生たちが持っているレベルや価値観や動機づけや見え方みたいなものをなんとなくわかって、なんとなく理解して、それに合わせるように場を合わせていく、みたいなことがあるじゃないですか。このやりとりが一番、ボクら教員にとっては、特に大学にとっては面白いところで、指導要領があってそれに従ってというのとは、ちょっと違うなあと思ってることなんですよ。だからその大学の教育の自由度みたいなものが、やっぱりそういうところに現れてきてほしいと思うし、みんながそういう意識は持っていてほしいと思うんだけど、一方でね、なんかこれ「を」教えずにちゃとかっていうふうになっちゃうと、ちょっと苦しくなっちゃうこともあるよなあって思います。

3.5 大学教員の環世界——自分事化への一歩——

田) これは少し個人的な見解になりますが、

科目は特定の教員のものではなく、学部全体、そして大学全体として提供する教育の一部であり、最終的には学生の学びのために存在するものだと考えています。そのため、科目をより広い視点で捉え、学部・大学の共通財産として共有していく意識が、これからいっそう大切になっていくのではないかと感じています。どうでしょうか。

佐) なんなら学生の科目⁽³⁴⁾とも言えますよね。そもそも、科目を抱え込ませてどうなんでしょうね。「私の科目」っておっしゃる先生おられるんだけど...

櫻) そうか、そういう意味で言うと、スポーツ学科の先生方は空いてると、〇〇先生の授業でちょっと手伝ってっていうと、いきますよっていう。複数の先生でやる授業が結構組みやすいんです。

佐) それはやっぱりスポーツ学科のマインドなんですかね。もともと、自分が向かないきゃあ、っていうモードになっているっていうね。

櫻) あとはあれかもしれないですね、一人でできない種目を経験している先生方がいる場合は、役割があるので、役割は果たすけども、できない苦手なところは助けてくれた方がいいものにできるというのが、感覚的にはやっぱりわかってて、ありがとう、助かった、って普通に言えちゃうところはあるような気がする。学生たちはそういうのを見てるので、できるって言ったら、ちょっと難しいですとまだ言えるんですけど、それを言えずに一人で頑張ってる子はやっぱりどんどんしんどくなってくるんですよ。

佐) 完全な自営業じゃなくてね、こっちはね。

櫻) ユニオンです。

佐) そうそう、商工会議所全体を見て、運営っていう感じがする。

曾) 経済の方は個人事業主的ですね。

櫻) そうそう、研修とかも、先生方が、本当

にすまなさそうな顔して、こういう理由があって行かなきゃいけないんですけど、いけないのでお休みいただいてもいいですかって、言いに来ていただけるんですけど、先生、それはもうご自身の権利で有給取れるわけだから、そっちの方が大事だったら取ってくださいって言うんですけど、それは本当に申し訳なくてっていうのが、スポーツ学科の先生だと思う。

曾) 一部の教員は、研究時間を確保するために学内勤務日を限定しているケースがあります。学生対応や会議のオンライン化が進む中で、柔軟なコミュニケーション方法の検討が必要であると感じているんですが、皆さんどうですか。

田) いつぐらいからそうなっちゃったのかしら。

佐) そういう点では教養教育部の先生たちは皆さん非常に協力的に感じますね。もちろん、良い悪い、やるやらないはキチンとおっしゃるけれども、その基本的な「人間する」っていうことはされているように見えます。それ人間じゃないじゃんっていう社会に合わせていないように見える行動を見てしまうと、なんだかこの大学では難しいことになるような気がします。—中略—京大や東大ならまだしも、うちの大学のような教育や学内業務がとても多いところで研究だけに向いてしまうというのは、善し悪しな気がしますね。

櫻) 自分の研究畑にずっといるような人たちはそうですね、その世界。行く気はそこしかなかったわけですか。

佐) その話、さっきの髪切処のマスターとまさにしたことありました。ボクもマスターも、わりといつも批判的にものを言います。ボクに関しては、まあみなさんご存知のように(笑)。なんだけれども、それは要するに理屈が知りたいわけですよ、理屈が。例え

ば、なんでここでこの事務書類を出さなきゃならないかの「なんで」を知りたいわけです。その合理性を示してくれるんだったら全然OKなんです。ところがその「なんで」っていうところが、「いや、この書類はこの書類を出さなきゃならないから必要なんです」とか言われると、カチーンとくるわけです。そういうふうなレベルの話で担当者たちが言ってるんだったら、それは人間になってほしいと思うんですよ。一方で、ボクわりと文句言うけれども、さっき言ったように、わりと真面目に手続きは踏みたいタイプでもあるんです。だからそういうのをやってない人がいると、ちゃんとやってってやっぱり言いたくもなる。だから、それはなんで必要かっていうことをちゃんとボクは言いたい。そしたらそれには批判はあっても、そこでやらないっていう手はないんじゃないかと思うんですけどね。

曾) そもそも人間とは何か、ということでしょうか。

佐) そうそう。だから人間として生きていますか、という話に結局はなるのでね。もちろん、一人で生きていくんだったら、まあそれは例えばの話、ニュージーランドの森の中で暮らしてくれよと思うんだけど、それができないから、ここにいるんでしょ、と。

菊) だから、今言われたような話も分かるのですが、私はちょっと考え方が違って、人間のやっていることって、全て理屈、その原因、理由がはっきりしているものじゃないですよ。たとえば、伝統的な部族の社会とかなら、あるしきたりが、なんでそういうしきたりになっているのか。なぜ、というのは後から推測はできる場合はあるけれども、全ての人間社会での行動に明確な理由や原因があると考えるのは、近代的な発想ではないかと思ったりするんです。近代合理性の中で、こういう目的があって、こういう理由があるか

らやる、その論理立てが実際にあるはずだという前提に立っているわけじゃないですか。だけど、実際、そういう論理立てが全てにできるのかどうか。実は人間の組織においても、古くからある大きな会社とかだと、あるルールが最初になぜ始まったかって全然わからない場合もあるんですよ。ただし、それが現在の視点から見て非合理で、明らかに問題が出ている時は変えようかって話になるけれども、非合理とまでは言えない、さほど悪影響がない場合は、それが始まった理由を突き止める必要もないし、実際に突き止めるのは難しい。実際、人間らしさの中には、そういう非合理性を知らず知らずのうちに内面化して受け入れるというのが「人間らしさ」ということもできる。だから、康成先生のような考え方は、やはり近代合理主義を前提にした考え方に見えますね。

佐) まあそうですね、科学的な見方をボクはしたいんでね。で、科学者でありたいんでね(笑)。そうすると、例えば、心理学で迷信ってあるじゃないですか。夜に爪を切ったらあかんとか、夜に口笛吹いたらあかんとかって言われてて、迷信としてみんな知ってるけれども、あれ実は理由があるよね、と。その理由考えたことあるかって聞くと、考えたことないって言う、学生たちみんな。じゃあ考えてみようってなって、それぞれ考えさせると、まあコメントにいろいろ書いてくれる。そういうふうな「批判」はやってねとボクは思っているわけです。だから科学的に批判できるものはできるだけしていきたい。でもおっしゃるような暗黙知的なものを批判するのはなかなか難しいだろうなとボクも思っているんで、そこはボクも一応理解はしているつもりなんです。だから科学的合理性というゆる人間の社会の暗黙知的な何かっていうのは、やっぱりちょっと違うよねと。

菊) ちょっと話が大きくなりますが、「野生の

思考」というか「具体の科学」という、近代科学の思考様式とは異なる合理性を持つ「もう一つの科学」を提示したのがフランスの人類学者、レヴィ＝ストロースですよ。もちろん私も近代合理性の上に立って研究をしているし、組織運営においては、暗黙知的な、ある作業をやることの意味も考えずに単なる前例踏襲的、非合理的なやり方は絶対よくないと思います。一方で、日常的な心構えとして、近代合理性の中に無意識に埋没してしまう自分を常にメタ認知しておきたい、という思いはありますね。

佐) だって、ユクスキュルの環世界ってそうでもんね。あなたの環世界とボクの環世界は違うのです、と。だからその境界はどこですかって言われたときには、やっぱり交わりませんか交わりますかっていうことになる。

菊) 間主観性っていうか、疑似環境⁽³⁵⁾が人によって違うので。まったく専門外なので、私が「間主観性」の説明をするのも何ですが、複数の他者が互いに主観を共有しあうことで「相互主観性」とか「共同主観性」ともいえる間主観性が構築されるものだと、私は理解しています。この社会において完全な客観性というのは存在しないので。自然科学の研究者の方の見方は少し違うかもしれませんがね。

佐) 間主観性もまたこれ難しいな…。前にも対談の中で出てきたんですけどね、ちょっとその話までいくと難しいからやめましょうってなりかけて(笑)。でもまあ環世界だけはね、なんとなく一応ボクらも生物なのでわかるから、自分の中でのそれだな、あなたのそれだなというのがね、きっとミミズの環世界があるのと同様っていうのはわかるじゃないですか。間主観性はなかなか難しいなって思うけど、この前ちょっと別件で議論したとき、「we」の発想というか価値観かなあ、てね。例えば、「私の」科目ではなく「私た

ちの」科目って言い換えるとカリキュラムの中の科目が意識されますよね。また、レポート出すときも、主観じゃなくて間主観性で考えろ、っていうのはムズカシイので、「私は」って書き始めるんじゃなくて「私たちは」って観点で論じてみて、っていうのはどうでしょうかね。あるいは、バレーボールで、トス上げる人とスパイク打つ人、それぞれが上げたいボールと打ちたいボールがホントはあるけど、ここで、weとして、スパイクしやすいトスを上げ、打ちやすいトスだったかのようにスパイクして、結果として得点できることっていうのが目的、みたいな、ね。でもまあそういう感じのものでできているわけですよ、今おっしゃった理屈のない、その何かっていうのは…。

菊) そうですね、疑似環境という言葉で言えば、疑似環境がある意味、同質化されてしまっているとかね、そこに疑問を持たないというね。だから、そこに疑問を持つのが確かに科学的な態度であって、まさに脱中心化ということにもなる。

佐) ボクの批判することなんてわりとレベルの低い、具体的なことばかりで(笑)、高尚なレベルの批判っていうのにはならないのですけども…。

菊) そういう意味では若い世代の言うことは結構理解できる部分はあって、私も若い頃だったら言ってるだろうなって。

佐) そうそうボクも言うてましたっ。話ちょっと別になるんですが、うちなんか部門会議、部門長が自分で議事録を打ちながら司会進行してありますが、その共有ファイルはみんなで見ながらやってるわけで、ボクらはあそこ書いてんだなっていうのを議論しながら待ってるわけです。その待つ余裕もみんなにはあって、そういうふうな、なんかこうある意味、議長や書記のやり方をどこまで認めるかとか、なんかそういう話でもあるじゃない

ですか。

櫻) それこそ今でいう新しい、なんとなくみんなが受け入れるルール、なんでこれがいいのかっていうのは、科学的に説明しようと思うと、わからない。でもこれが一番いいよねっていうものを作っていくかどうかだと思っただけですよ。その辺が、たくさん人がいればいるほど、意見の違いも出てきて難しいとは思っただけです。

佐) なんかでもこのぐらいの100人ぐらいの所帯⁽³⁶⁾ だったらもうちょっとなあと思うけど、なんか、なんかパパパッと動かへんなあ。

田) ほんとそうですよね。100人しかいないんだから。

櫻) このメンバーだから余計思うのかもしれないですけど、僕らは金沢星稜大学の教員なので、何を教えているか、どこで教えているかという、学部学科に分かれるんですけど、まとまる場所は金沢星稜大学なので、このユニットで何かやるっていうことが少なすぎるのかなっていう気がしますよね。100人ぐらいだからこそ。なんかやるときって、問題が起きたときに上から説明されるとか、面白くないから文句言うぞみたいなことしかやらないんで、なんかこう、円滑な人間関係で回っている感じではないですよ。その辺もうちょっと風通しっていう表現はあまり良くないのかもしれないですけど、してもいいのかなって。これって大学だけだったらうまく回りそうな気がするんですよ。

曾) コロナ禍の際には、大学全体で協力し、オンライン対応や情報共有を円滑に進めましたよね。多くの教員・職員が連携し、状況に応じた授業提供を工夫したことは大きな成果であったと思います。しかし、そうでないところも学園内にはあったと思います。今でもそうですけど(笑)。今後は、平時から各々が協力体制を強化し、全体で一貫した対応が

できる仕組みを整えることが重要だし、過去の成功事例を参考にすれば、100名規模の教職員でも十分に実現は可能だと思うんですよ。

櫻) 佐々木先生のさっきの言葉で言うと、自分事にならなきゃいけない。

曾) そうそう、それじゃないとまとまらないのかもしれない。今やろうと思っているのは...

櫻) 学外出ていくと、金沢星稜大学の櫻井なんです。スポーツ学科の櫻井ではないんですよ。そうすると「経済学部、今年入の厳しいんですか」とか「人文ってやっぱりまだレベル高くて難しいんですか」とかって聞かれて、人文も2つに分かれてって、僕が説明するときもあるわけですよ。でもそこを学部長だから説明できるっていう風に見られると、これは違うぞ、と。いや、星稜の教員だから聞かれたら答えたいし、答えてあげることがこの大学にとっていいことなんだって思っていれば、興味わくわけじゃないですか。でもそうじゃない人は、学部が違うんでわかりません、学科が違うんでわかりません、ちょっと問い合わせてみてくださいで終わると、自分が大学を知る機会を逸しちゃうわけじゃないですか。そういうことをホントは普通に話せるような人数であるわけなので、先生方が持っている問題意識とかも共有できるはずなんで、というところが、なんとなくもうひと頑張りできそうだなっていう気はするんです。

佐) そういうグループ、それぞれで見たらそれぞれあるかもしれないけれども、なんかそれらが全体にFDで、とかってなると、なんかちょっとぎこちないんだよなー。もうちょっと違う方法とかカテゴリーがある気がするなあ。

田) そうですよ。なんかコロナ後遺症みたいになっちゃって、みんな。

佐) それぞれちょっと対面であっても、なんかぎこちなくなるみたいな。うわーっていうふうにはなかなか、そうですねーこういう今話してるような場の感じにはならないんですよ。

田) あれ、みんな試験監督で仲良くなるじゃないですか。あれもっとシャッフルして。

佐) あれは一ついいと思うんですよ。

櫻) 地方入試で1回ご飯食べるって結構ね。

田) 本当にそう。

佐) ボクねえある経営学科の先生と懇意になったのは、地方入試でした。次の日監督なのに前日二人でベロンベロンになっちゃって(笑)。

曾) あ、そうなんですか、ああ、そうなんや(笑)。

佐) みんなとの飲み会の後、ちょっと部屋来ますかあ、みたいな話になって、ホテルの部屋で2人でカップ麺食ってましたよ。

全員 (笑)

佐) その先生が来られて2年目ぐらいだったと思います。それからあとも焼き鳥屋行って、しかも飲まずに食べるだけで5時間ぐらい喋ってた、みたいなね。わりと彼もそういうのを厭わない、いろんな人とそうやって喋るのを厭わないタイプの人でした。基本的には建設的なことを言う人とはそうやって喋ってたように思えます。時間はあんまり無駄にしたくないタイプ、というか...。ボクも同じなので(笑)。

曾) そうそう、そうでしたよね。

3.6 ゼミナールのあり方と展望

田) ...これ今、4年振り返っただけでこんなになっちゃいましたよ。

佐) まあね。この時間⁽³⁷⁾。もういきなり今後の展望へ行くしかないかという感じの時間になりましたけど。まあ、実は、この会を催そうっていうのは、最初は田中と佐々木でしゃべればいいのかかと思ってたんだけど、これか

らの本学の高等教育としてのありかたを考えるとということに鑑みて、何かしらミドル経験者として残しておいたほうがいいかなあと。せっかくこのメンバで今まで4年間考えてきたことが、なんか全くなくなってしまっているのはちょっともったいない気はしているのです。今や教養とか学部とかの再編ということが考えられていると聞き及びますから、何か今の段階でそれぞれの学部から教養のあり方とかを考えたときにどういうふうな形がいいかっていうのがあれば、ぜひおっしゃっていただくといいかなと思うんです。

曾) 教養教育は引き続き重要視すべき分野だと思っています。ただ、経済学部のST比のこともあり、教養教育部を解散して経済学部のほうに人材を振るべきという風が吹いています。経済学部では、ゼミ担当の負担や学生の希望とのミスマッチが課題となっています。希望するゼミに入れない学生から不満の声が上がったり、「転ゼミ」希望もです。経済学部の一部には教養教育部との業務の差に不満の声があることは確かです。

先生の中にはゼミを最重要視されている方もいらっしゃる。ただ、個人的に私は重要視していません。あれほどその学生と近づかなくてもいいのにといいふうにも考えています。

経済学部のゼミは不本意にゼミに所属しなきゃいけない場合が出てきます。私のゼミだとかほかのゼミだとかいったように、あの第五希望でやっと入れたとかね、二次募集でやっと入れたとかっていうようなゼミの学生って本当につまんなそうなんだよね。だからこれ、できれば反対は多いかと思うんだけど、「nonゼミ」の仕組みを作って、しっかりこのゼミでもいいのか、そうでないならnonゼミってシステムがあることで別の方法や科目で充実した時間を当てられるというようなことができないかとね。結果としてnonゼ

ミに相当する単位数を教養教育科目などで配当するとか、そういった仕組みをね、やっぱり作って行って、教養の先生にも経済の学生をね、幅広く見てもらえるってようなシステムを作れば、教育資源の不均衡を全学的にも軽減できるんじゃないかなっていうふうに思っています。ただ経済や経営の先生方って、本当にちゃんと専門ゼミ、経済に来たんだから、やはり専門的なことをちゃんと勉強して出て行ってもらわなきゃいけないんだみたいな人がすごい多いんですよね。で、私はももとの専門領域が経済でなかったんで、こういうことが言えるのかもしれないけども、あまりそのゼミをこれだけ、なんていうのかな、大事にしなくても、私はいいというふうに思っているんで、まず今後の展望として申し上げますと、ゼミの見直し、専門ゼミの見直しと、教養ゼミも加わってもらった、そのnonゼミシステムみたいなところの構築みたいなのがしたいなっていうのは、まずそれ一つありますね。

佐) 「教養ラボ」⁽³⁸⁾という科目もすでに始まっていることですから、なにか高年次教養教育という観点からもできそうな気はしますね。たまにね、2年次とか3年次の学生が、先生のゼミないんですか、って言うてくる場合があります。何のゼミって言ったたら、3年生、4年生のゼミって言うてて、いや、ボク教養だから無いのよって言ったたら、「えー」とか言うてて、まあそういう感じの学生は毎年ちらほらいるんですよね。他の教養の先生方の科目でもちらほら多分いると思うんですよ。ただそのちらほらさ加減がどのくらいかっていうのがちょっとわかんなくて、例えば10人とか15人とか持てるほどのゼミのサイズには多分ならないんだらうなとは思っています。一方で、もし教養の先生たちが加われば、例えば基礎専門ゼミナールなんかでも、一つのゼミのサイズは16-20くらいにはなるだろうと

思うんです。そういうのは、ある意味、一つの手として考えてもいいかなとは思いますが。昔は2年次基礎ゼミは教養の先生たちも担当してたからね。

曾) 経済学部の中にはゼミを大事になさる先生もいらっしゃって、特に経営のゼミは人気だってこともあって、経営の学生が経営のゼミに入れない場合があって、やっぱりそれを学生に不利益だということをおっしゃっています。だから今回、来年度のゼミについては経営の先生は経営の学生が希望したらなるべく経営の学生を取るようになっていうふうなことでやりはるみたいですね。ちょっとあまりうまく表現できないけど、それだけその学生のためにということまでしなければいけないのかと、単純だから思ってしまう。理系の学問のゼミであれば、所属ゼミで就職や大学院ということまで影響されるが、文系のゼミですから、多様な学問に入っていくこともいいのではないかと考えますよ。

佐) そういうふうな経営学科のゼミの方が多分人気があるので、それもあって経営学部化っていうのを急ぎたいっていうのもあるかもしれないですね。ボクから見ると、経済のいい子たちが経営に入ってくれるんだったら、パイ大きい方がいいんじゃないかとボクは思うんですけどね。学科から学部化するよりはね。しかもさ、レイトスペシャライゼーションっていうのを掲げてるんなら、なおさら学科間「越境」できるようにしておく方がいいんじゃないかなというふうに思います。単に定員大きくするだけでいいと思うんだけどなあ。

曾) それと、地域システム学科をもうちょっと頑張りたいですね。ただ教員の出入りがあるので、なかなか厳しいかなっていうところもあって、ちょっと今日若手と話してたのは、観光がいなくなっちゃうのであれば、本当に「システム」というのを全面に出して、

それこそその政策系のところをしっかりとやりますみたいな学科にしてもいいんじゃないかなっていうのはあるけれども、ちょっとその辺は今しっかりと考え直さなきゃいけないなと思って...

佐) だから「デザイン」の方に重きを置くか「システム」の方に重きを置くかっていう話ですよ。

田) でも、世の中の潮流はデザインですよ。

曾) うん、デザインですよ。

3.7 クラスサイズに合わせた調整力

佐) だから、そういう意味でボクなんか期待するのは、こういうような議論が今後全学的にできるようになるのかな、どうなのかなというところ。それしていかないと、本当に屋台骨が折れてしまうっていうようなところはあるかなと思いますけどね。曾我先生のこの4年間は、先生側の方はしんどそうなのはあったけれども、幸い学生側の方は、あるいは生徒たちのほうは、この4年間入学者数としてはMAXで来てくれるから、結果としてしんどくなってるんであって、そのMAXを絞ればそうはならないだろうとも思うし。

曾) そう、MAXで来ちゃってるのと、プラスして、先生が出て行っちゃったっていうのがダブルでやってるからね、学生は増えるけれども教員は少なくなっていくっていうね。

田) なんで出られるのか、分析が必要かもしれないですね。

曾) そうですね、それから聞いてもらって、出て行く時にどうしてですかって聞いてもらいたいなっていうのと、来ないのもね、なぜ断ったんですかっていうのをしっかりと聞いてもらって改善していかないと、教員集まってくれないな。

佐) 教養の方でもよく言うのはね、教養の科目って、クラスがめっちゃ大きくなったり、めっちゃ小さくなったりするんですよ、本当

に。10とか20の学期もあれば100とか200になるとかっていう、時間割に依ってね。教員たちはそれに結局毎年対応してるんですけど、どの学部もそうされればいいんじゃないのっていうふうにボクらはとても単純に思っているんです。つまり、入学者が1.3倍来ようが1.0倍で来ようが、1.3できたら1.3に合わせたリソースの分配をするしかないんだから、こっち側は。それらに合わせて違う教育するしかないでしょ、と。なので、決して質を下げるといって話ではなく、対応するっていう話なんです。なぜ同じことをやろうとするのかな。同じことをやろうって、無理でしょ。そもそも同じことで対応できるわけないんだからねえ...

曾) そうなんだって、いないんだからね。

佐) だってボク、ちょっとむかし、心理学の授業で150とか200とか履修者あったときに、まさか今の数十人とかで毎週添削してるレポート課題の課し方や見方なんてしませんでしたよ。たくさんは書かないような課題での教示の仕方や方法を提示してましたよ(笑)。一方で、今数十人の場合はたくさん書けるように教示してます。多く書くのと少なく書くのがあるけど、ボクとしては日曜日半日でなんとか採点と添削ができるようになる。でも同じ日曜日半日なんだけれども、150人とか200人とかいたら、その数と量の程度に応じて書かせるし、添削だって全員できるわけないし(あ、100くらいだとやってましたけどね、土日合わせて10時間ほどかけてw)っていうのを考えますよ。最大と最小の文字数の学生の分布に鑑みて添削や評価はコントロールしますからね。人数多いときはその中にある程度書く学生がたまにいるな、すごいなって思うぐらいでボクは扱ってる。そういうふうによければよくないですかっていうね。履修者一人違うとめっちゃ違うみたいに感じる教員もいるみたいなんですけど、そりゃあ

10が100になったらたいへんですが、10が12になろうが15になろうが、まあまあその間でなんとかするわいな、ていうふうになると思うんですよね。ゼミなんかでも同じ卒論の指導をしようとするからおかしいんであってね。ゼミ生全員がみんな同じレベルで書くなんてことはふつうないでしょう?

曾) なかには目一杯ご指導される方もいらっしゃるって、ご自身はしんどくなっちゃってるんですよね。「ゼミの人数が多すぎる」といった不満が出る。私は今年19名、卒論提出するのは18名ですが、形式やルールに重きを置いて、その基準を超えればほぼほほいいとしている。私のゼミ生は1年次からの学問の積み重ねにやや難がある学生が集まっています。今年はそれを念頭に入れてできる範囲で、ルール重視で進めています。

佐) ね、そうでしょ(笑)

曾) しかし、先生の中には「これまでこういう風にやってきたから、同じことやっていく」っていうのが、やっぱり身につിച്ചちゃってるのかなと思うし。で、先生の中には「いいものを出さなきゃ」という風に考えてしまう方もおられます。「博士を取るんじゃないから」っていうことは申し上げてはいるんだけど。学部のだからね。

佐) だから、その辺の調節、あるいは調節力、そこじゃないですかね。だから不真面目にやるとか手を抜くとかそういうことじゃ決してなくて、調整力だと思うんです。

曾) そやからね、同じようなことを別の先生もやってないといけないみたいなことになる。「自分はこのだけやってんだから」みたいなとか。

佐) じゃあやなくていいよって感じですよ。じゃあやんなよ、そんなんそう言うんだったらやんなよ、てね。なんべんでも言いたい(笑)。そのような比較を言うんやったらやんなよって感じですよ。なんか、例えばね、その

教育のご自身の何かがものすごくあってって言うんだったらまだわかるけど、他人との比較でそんなん言うんだったら、もうやんなや、やな。

曾) そこ、なんだよね。だからなかなかその辺が...

佐) それはやっぱり調整力を発揮してくださいねっていうことについて学部長なり学科長たちが指導すべきじゃないですか。

曾) そのね、「調整力」と「手を抜く」の差はどう説明したらいいんだろうと思うんだけどね。

佐) 説明はいらんんじゃないですか。調整してください。適応してください。対応してください。

曾) これだけの人数しかいない。で、それに対応してくださいっていう風に言うしかないよね。

田) 今年ディバートのクラスで31人担当しています。ディバートですよ。実践、運用の科目です。来年から2クラスに分けようとなったんですけど...。20人の履修制限は無理でした。ここ数年25-30人くらいで動いているうち、全員が常に参加できるような状況をつくることできるようになっていきました。某大学でビジネスイングリッシュっていう会話の授業を80人回したことがあって。ワイヤレスマイクつけて歩き回りました。そういうのでもなんとか回すし、履修者が増えたり、人がいなかったらやります。

佐) ディバートとかだったらブレイクアウトルームとかに貼り付けて、しかも評価する側も学生にやらせて、ってボクならやります。

田) そうそう、だから2チームに分けてオーディエンスチームとそれから戦っているチームで、オンラインじゃないから、現場なんですけど、オーディエンスチームがGoogleフォームでピアアセスメントするっていう。

佐) うん、だから、何かしら方法があるんで

すよね。

田) 時間もきちんと計ってやるんですけど。

佐) それを考えるのが教員でしょっていう話ですね。

田) そういう授業経験がないと、でもなかなか難しいですよ。

曾) やっぱりできないと思う、たぶん。手を抜くことは。

佐) 授業経験かなあ?? ...ボク、創造性、だと思っけどなあ。

櫻) よく教育の質が落ちるって言うんですよ、そういう人たちって。

全員) そうそう、言いますね(笑)。

櫻) クラスを細かく割って、きめ細やかにやらないとダメだっていうのがやっぱりあるので、どうなんだろうなっていうのはありますけどね。

昔の本当に国立大みたいに教養教育にしておいて、とんがったところを学部学科にしていっていうことをみんなで飲めばいいだけであって、どここの先生は授業数が多い少ないとか言うのってナンセンスですよ。そんなこと言ったら、僕14人の専門ゼミ生を見てるんですよ、今年。七十何人しかいないのに。ある先生は2とか3ですよ。でもそんなもんだと思ったら、それこそそんなもんですよ。

佐) うん、たしかに、そんなもん、ですよ。だから2でくれば2だし、15でくれば15だしてね。

櫻) 体育館でバレーコート2名。指導法をやりたいんで、8人ずつの4チームで思ってるんですけど、今年来たの56なんです。でも56人取ってくれるんか。いいよ、全部取るよって言って。ガラッと授業の内容を、やり方を変えるんですけど、伝える内容は変えられないので、伝え方を変えるんです。

佐) やっぱり、みなさんのお話を聞けば聞くほど、創造性、だと思えますね。ただ、もち

ろん、ご本人がどこまでの裁量でっていうのをご存知ないっていうのも一つ問題かもしれないと思ってます。どこまで評価していいのか⁽³⁹⁾とか、ここまでやっていいのかって、経験のある先生でさえおっしゃる方がおられるんでね。

菊) ガチッと定型的にやらんといかんと思いでいる先生もいるのかもしれませんがね。

3.8 学部レベルの卒業研究のあり方と指導方法

櫻) ところで、以前、卒業研究についての議論がありました。人文学部のほうは異論なしで継続なんですか。

田) 4000ワードくらいは乗り越えましょうということですね。

菊) 人文学部の教育からすると、やっぱりあった方がいい気がする。あれぐらいのことを書けないと。今普通のレポートなんかは、学生たち、適当にAIとか使って書きちゃうじゃないですか。本当の意味でのレポート、論文を書く機会が卒業研究までないような気がしますね。

田) ちゃんと集中して研究をするんですよ、その時は。だからそれはとてもいいことと思ってるんですけど。

櫻) 一部の先生はもう卒業研究すら書けない学力の子たちがいるから、必修化するのはいかがなものか。ある種のを射てて、そこに能力を割くのであれば、4年間の活動報告書をまとめて書くという選択肢も卒業研究という枠に入れてもいいんじゃないかというのは、ちょっとスポーツ学科の中から出てきてる。

佐) でも実際、経済学部だってさ、卒業研究報告書なんだからさ、別に内容それでもいいじゃない。

曾) いいと思う。

佐) せんせも前からおっしゃってるように、一年生からどう学んできたかでもいいし、野球何やってきたかでもいいし、その活動の実践報告、普通によく学会誌でもある実践論

文と同様にね、実践報告として書いてくれればさ、ボクそれ別にかんりの力を養うと思うよ。

曾) 結局その経済なんか、その、実験もないしね。もうあの、本を写すぐらいでもかなりの力になると思うよ。経営は経営で、そのどっか企業行ってきました、その企業のなんたら分析しました、みたいなのもイイと思う。だからそれはそれでいいんじゃないかなって思って。結局そんな新しいものなんか出してこいって言ったって、ちょっともう難しい。インタビューいきました、インタビューでこういう風に答えてもらいました、だけでも十分かなと思ってるんだと思いますよ。そんな、ちょっと今年の学生には厳しいけど、どんなふうでもいいじゃないか、実践報告で十分じゃないかと思えます。

佐) ホント、実践報告で十分でね。なんなら、そういった具体的な事例報告やインタビュー報告のほうが多くての価値を持っている場合がありますからね⁽⁴⁰⁾。

田) それでも難しいっていうか、それは大変な作業ですよ。

佐) 前もどっかで言ったけど、やっぱり卒論は「方法」までできればもう十分。結果なしでも、方法を考えてこういうことをやりますって、あるいはやりましたまででオッケー。で、修論は「結果」まで出してくれと。で、博論はいくつかまとめろという話になるからちょっと話が別だけど、修論までは、ある意味ここまででいいよっていうのはあっていいと思っています。

曾) うん、そうそうそう。

佐) それと、卒業研究の指導は教員によっていろいろあると思うけど、特に実践系の研究の扱いでは教員間で考え方にばらつきがあるでしょうね。デザイン学分野では実践論文も多いですが、経済学分野では卒論で困ることは少ないでしょうから、もっと実践系の

研究もあってイイなと思いますね。

ところで、人文学部でも優秀論文の賞があるようですが、それは一体何を目的に選定を行っているのでしょうか？この制度は全学的に再検討が必要だと感じてるんですが。

田) 人文学部でも優秀論文の選定はありますが、まずゼミごとに優秀な論文を選び、次に学科全体で最優秀を決定しています。スポーツ学科のように学位授与式で表彰される「学長賞」のような大きな賞は人文では難しいため、せめて学内での表彰制度があれば良いと考えています。

櫻) 本来、優秀論文は、学生のモチベーションと水準を上げるために始まった制度だったのですが、現状は「先生からどれだけ細かく指導を受けられたのか」の指標に近いのかなと感じることが多く、この制度の役割は既に終わっているのではないかと考えてます。

曾) 優秀論文として提出されてくれば、審査員の人選や組み合わせを調整する作業も出てくるんだよね。

3.9 「私の科目」論、再び

佐) ちょっと関連して、さっきの「私の科目」っていう話もそうだし、それからある種のエンクロージャー、囲い込み、学生の囲い込みもそうだし、そして科目の囲い込みもそうだし、さっきの卒論指導とか優秀論文の話もそうなんだけど、それって教員一人がそこだけで全部教育できると思ってるんですかね。そう思ってないと、そんなこと言えないと思うんです。124単位というカリキュラムで人を育ててるっていう意識になってないっていうことでもんね。

田) ある科目一つに注目したとき、それはあなたの科目じゃなくて学部や学科でみんなで特定の能力を上げようとしているっていうことが、ほんとはありますよね。

櫻) 今のお話を聞いてですけど、やっぱりスポーツの資格取得って、主たる先生はいるん

ですけど、その先生が持つ科目のほかに、絶対学ばなきゃいけない科目っていうのが他分野に分かれているので、そういう感覚ってあんまりないです。俺の下にいればこの資格取れるっていう風にはなってなく、窓口業務でこの資格は俺な、この資格はあの先生ね、みたいな感じにはなってるので、それも学部学科の特色なのかもしれない。

佐) だから、そこ行くためにはこれだけ必要、ここ行くためにはこれだけ必要、それぞれがかぶってるから、お互い協力しないと、目的のところまでは行かないわけですよ。それって結局カリキュラムですよ。

櫻) 今言われているのが、今のスポーツ学科のカリキュラムの根底にあって、3つの主たる分野⁽⁴⁾がそれぞれと重なり合っていて、資格を取るときはそれぞれの分野のこの科目が必要、とかって作っていくしかないんですよ。なんで、今言われていることがスッと入ってくるんです。

佐) そうそう、文系と違って理系は多くがそうですからね。基礎科目が必修になって、その上に次の科目が2年生、3年生の科目としてあるわけだけど、それらの科目は特定の研究室に行くためだけに必要なわけではなくて、ある研究室に行くためには一定程度の科目「群」が必要になるんです。でも、いくつかは絶対かぶっていて、だからこそ私の授業をとってないところしかないぞとかっていう話にはならなくて、私の授業や研究室に来てもらうためには、実はあの先生のもあの先生のも取っててもらわないとねっていうくらいに、ものすごく数多くの科目を履修しなくちゃなんないわけです。こんなこと言ったら語弊があるかもしれませんが、「私の科目」って考えてるようなのってね、文系ってそんな簡単な分野ばかりなんですかって思ってしまう。担当の科目だけで済むようなそんなちっちゃい分野なんですかってね。

- 田) 一体なんだろうな, 「私の科目」っていうのは…。
- 佐) もうちょっと「私の科目」論についてしゃべりましょうか。
- 田) 科目を作ったり, 担当者を探すときにこの先生ならこれがご専門だろうなっていう想定はしますよね, 当然。だけど, その方が担当でなくなっても, その科目は継続するわけだから…。それはその科目の名前を出して, 違う先生が来たら違う料理するんだっていうものじゃないですか。ある種の枠組みだけであって, それは「私の科目」ということではなく, プログラムの中の枠でしょう。だから, 科目というのは貴重品が入った引き出し, 何段目のどこに置いてと決めたのがプログラム, 棚枠がカリキュラム, 設置部屋が学部, 建物が大学。引き出しを勝手に持ちだすことなく, 引き出しの中の貴重品をしばらくの間預かって運用するのが教員, でしょうか。
- 佐) たいへんよい喩えだと思います。そもそも今や大学のほとんどは小講座制じゃないんだから, ね。医学部じゃないんだからさ。大講座でみんなやってるんで, カリキュラム全体でどうかっていう話なわけなんですよ。そこを「私の科目」とかって言われると, もうカチンときますね。
- 田) いわゆる一般的な普遍的な科目名を専門教育科目の中でつけると, 担当者によっては専門性に合わせて科目名を変えたほうがいいっておっしゃる場合もありますね。
- 佐) それはボクに言わせると逆で, うちの教養教育科目が, なんで「心理学」とか「哲学」とかっていう名前になっているかというところ, どなたでも担当できるようにしてあるんですよ。これを例えば, 「認知と知覚の心理学」ってやったら, 本学ではもうボクしかできひんくなる。でも, 「心理学」っていう科目の中で, ボクは「認知と知覚」を主に授業としてやってるんです, っていうふうな科目の立て方ってできないですかと…。専門であってもですよ。だって例えばの話, 「地域経済学」って言って地域経済全部やれるんかっていう話じゃないですか。いや, なんなら, 地域経済学科を作ろうとしてたぐらいの名前なのに, 地域経済学っていう科目のたった15回で全部語れるかってムリですよ。そういうことをどのくらい皆さんご存知かしら, あるいは自覚されてるかしらっていう話で, さっきのメタ認知そのもの話でもあるんですけどね。
- 菊) 教員によっては, なんか自分のアイデンティティとして認識されているケースがありますね。
- 佐) それはあるでしょうね。そう言われる方はみんなその傾向はあると思う。だから「私の科目」論は, なんか本当に分析してみたいっていうか, 今この皆さんが学部長でおられる間, いろいろと見えている状態だから, 本誌のサプリメントかなんかで来年度の本誌で付けていくっていうのはどでしょかね(笑)。「私の科目」論, 「私の学生」論, いろいろ議論できそうです。
- 曾) ありますね。
- 佐) だから「私の学生」論で言えば, 例えば, 「うちのゼミ生」っていう言い方とかもね, 「うちの学生」っていうのとかもなあ。
- 田) 冗談では言いますけどね。まあ, もちろん。めっちゃ活躍したのよ。私が育てたのよ, みたいなこと言うけど。
- 佐) それはもちろん。ボクも言います(笑)。
- 曾) これは本人だけなんだよね。本人を大事にしている。まあ大事やけど。
- 佐) だからよく見れば大事にしているように見えるけど, それ見えてるだけだよ。
- 曾) そうだと思う。
- 佐) 本質的な教育としてどうですかって言われたときに, やってるよ, っておっしゃるでしょうけど, はたして, どんなものでしょう

か、客観的にやられてますかって。

田) 自分たちの院生の頃とか振り返って、自分がついた論文指導をしてもらった先生とかに、さっきのことを一緒に考えてもらうとかね、これを終わったらじゃあどうするかとか、そういう立場で言ってもらってというのはあるんですけど、なにかこう一緒に苦楽を共にするみたいななんかそういうのがあるんじゃないですか。そういうサークル的な感じの…。

佐) 役割の使い分けといえはそうとも言えるんでしょうけど、でも普通、ボクなんかの感じからすると、誰とでもこのままの感じでコミュニケーションすればいい、っていう感覚があるから、やはりメタ的、客観的っていうのがいつも必要なんじゃないかなと思う。

——中略——

4 認証評価とステークホルダー

田) メタ的、客観的ってね、本当にね。…また少し認証評価の話になりますが、この一年半ほど、私は認証評価と共に過ごしてきたような感覚があります。今回の作業を通して改めて感じたのは、大学が本来あるべき姿を整理し、フレームワークとして言語化しただけであって、実は難しいことを言っているわけではない。私たちの大学が日頃から取り組んでいることを、そのまま文章としてまとめただけなのだと実感しました。

文書化を進めながら振り返っていく中で、あらためて、大学がどれほど多くのステークホルダーに支えられているのか、そして大学の評判が高く保たれているのは、日々関わってくださる多くの方々のおかげであると強く感じました。内部質保証というのは、外部からの支えを受けて内部の活動が機能し、その成果を地域社会に還元するという、ごく自然な大学の姿を示すものでもあり…。もちろん文書化の過程ではさまざまな指摘がありまし

たが、認証評価に取り組んでみて、7年ごとにこうして大学を振り返ることには大きな意味があると感じましたね。

今回、学部長の先生方や協議会の先生方には、評価に向けたやり取りやプロセスを実際に見ていただく機会がありましたが、普段こうした業務に関わらない教員にとっては、「何の作業なのか分からない」という印象を持つこともあるかと思います。実際、私自身もかつては同じように感じていましたので。だからこそ、大学で行われている一連の仕組みを、外部からの要請として受け止めるだけでなく、教学マネジメントの一環として理解しながら教壇に立つことと、そうでないこととは、教員としての視点が大きく変わるのではないかと思うのです、実際…。

こうした取り組みは煩雑に感じられる部分もあるかもしれないのですが、若手の教員をはじめ、これから大学の教育研究を担う世代にも、大学の運営がどのように支えられているのか、そして教育・研究活動が国内外の基準や潮流とどのように結びついているのかを理解してもらえよう、情報を共有していくことが必要だと感じています。これは日本に限らず、OECD諸国、特に英国や米国でも極めて厳格に行われている取り組みであり、どこに行っても必ず向き合うべき領域です。フレームワークの存在を負担に感じることもあるかもしれませんが、本質的には大学として当然取り組むべき内容であり、その意義がより多くの教員に伝われば良いと改めて思った次第です。

さらに、本学は特に地域からの支援によって成り立っている大学です。ステークホルダーと言われる方々との関係を大切にし、そのつながりを損なわないようにすることが重要だと思います。今後、担当される方には、大学として大切にしてきた連携を継承し、丁寧に取り組んでいただければと願って

います。

佐) 認証評価の最初のドラフトのときにね、ボクが結構チャチャ入れたじゃないですか。あのとき、学長室でみんなやってたときに…。それなんでなの、なんためなのって、ボクはたくさん問いたくなってたんですが、それがハッキリされてないものは、やっぱりうちの大学ではちゃんとできてないところがあったりね(笑)。

田) 本当にそうでした。

佐) なので、それをじゃあ今後指摘する人は、誰なんだろうなあ、そういうのを直していく人はじゃあ誰なんだろうなあ、というのが非常に心配ですね。だから認証評価とかのプロセスを経ることで、何でも意味をつけて行ったほうがいいじゃないですか。やらされてるんじゃないでね。さっきの図書館ツアーの話でもそうだけど、自分で意味づけて何かやっていかないと、ホントに意味がないですよ。だから何やってもそうだけど、今やってるこのことは意味を持っている、っていう風に思っていないと、なんかちょっと生きてどうやねんって思うから、せっかく貴重な人生を過ごしてるんだから、しかもいい仲間たちと過ごしてるんだから、それぞれやらされ感よりは意味づけしながらやったほうがいいだろうって思うんですよ。認証評価なんか本当にその最たるもんだったなっていう気がします。

田) 実際、取り組んでいる最中は「なぜこんな作業をするのだろう」と思うこともありましたけど、今お話に出たように、その「なぜ」に明確に答えられない領域というのは、IR⁽⁴²⁾を含め、足元が固まっていなかったところなのだと思います。準備が不十分なまま授業に臨んでしまい、指摘されて困ってしまうような状況に近くて、その基盤部分を今の執行部が一つ一つ丁寧に整えてきたという実感があります。現在はその最終的な仕上げを

している段階ですが、そうした見直しによって大学という組織が確かに動いているのだと強く感じています。

進める中で、さまざまな学外の研修にも参加しましたが、日本国内の多くの大学が同じように努力されていること、そしてこの課題は日本だけのものではないことを学び気づかされました。世界的な潮流であり、各国がある意味同じ方向を向いて取り組んでいるのだと思います。世界各国、特にOECD諸国では少子化とともに大学進学率が上昇しており、それに伴って大学のあり方はどこも同じで、内部改革が求められています。ハンガリーを訪れた際にも、まったく同じ悩みを抱えているという話を聞きました。予算は理系分野に重点的に配分され、人文社会系は厳しい状況に置かれがちで、ロボティクスなど成長分野に資源が集中するという状況が共有されていました。「同じ悩みを抱えているのだ」と。そして少子化の問題も、日本だけの特殊事情ではなく、世界中が直面している課題です。

佐) ボクいつも思ってるんですよ、この規模のこのレベルの大学でね、逆にいろいろよく揃ってるなあってね。なんか、わりとちゃんとできてるんだなあっていう感じがします。

田) そうかもしれない。規程にしても教学マネジメントにしても、そして教員の組織や事務方の働きもね。

佐) このレベルのこの規模の大学にしてはっていうのね、もうちょっと皆さん誇りに思ってもいいんじゃないでしょうかって気はします。事務方にしても、補助金のためっていう側面ももちろんあるかもだけど、ホントに、学生やら教員やらの環境を良くするっていうことに、ちょっとでも良くなるようにって思ってくれる人は一定数おられるんでね。まあ、そういう人たちがいてくれる間はいいなあと思います。一方で、粹組みだけとか

責任だけとかっていうふうにして、私の仕事はここで終わりです、っていうふうにされるような人が増えてくると、ちょっと苦しくなるだろうなあとは思いますが。いっしょに創造的にやってくれるっていうのが、高等教育という大学の場としてもいいんですよね。ボクもだから認証評価って本当にこうやって携わってみると、あ、なるほどなあ。だから、いろいろとそうやりやりして振り返りながら良くなっていくんだということがわかりましたよ。

田) 実はPDCA, ちゃんとまだPDCAになっていないところもあるんですけど、循環していることが、途中で弱いところも。

佐) そう、でもね、そのこと自体に気づけるからね。それは非常に良かったなと思いますね。

櫻) 今後その辺、そういった「プロセス」を誰が検討して、どうハンドリングして意思決定していくのかですよ。

佐) いやまあ、な、そうやな…。

櫻) 例えば、津幡に経済学部を持っていくってどうですか(笑)。

曾) 経済学部を? やめてください。

櫻) どっちに転ぶかなって。広い土地にひらべったーいを作って、なんか憧れのキャンパスみたいな感じです。

曾) ここにあるから来てくれるようなもんだよね。

櫻) (笑) 経済学部の津幡移転は冗談ですが、人間科学部の学科の学部化はしない方がいいと思っています。でも、人間科学部の学部化の話があるってことは、多分スポーツ学科を向こうに持っていくっていう構想なんじゃないかなと。

曾) そうなんです。経済学部の方も、うまくいっているのに経営学部というのはどうかと思いますね。あと、入学選抜の志望動機なんか見ていると、本学の経済学部を希望する高

校生は、経済学科と経営学科の区別がないし、いま、経営学科が人気になってきたのはなぜかというのを高校の先生に聞いた方がよいかもかもしれません。

櫻) 人間, 人文, 教養の3つが総合科学部になるってイメージ?

田) ああ、そっか。まずそれなら、そうですね。それならそうだね。

曾) 2学部構想ですね。経済学部と総合学部の2学部構想。

佐) 総合科学のああいうカリキュラム⁽⁴³⁾とかも、大学でも全学でできるようにしたらいいという経営層のご意見もありましたね。

5 組織経営と人的資源管理——対話を通じた組織の自己変革に向けて——

対談の終盤、今後の課題を展望しようとなったところ、組織経営や人的資源管理に関する様々な課題が挙げられたので、いくつかの論点に分けてまとめて記述することとする⁽⁴⁴⁾。

大学の外から来た教員から見ると、組織をいじっているだけのように見えるというところが学校法人には見受けられるとよく言われる。誰が何をどのように動かしているのかが見えにくいという側面を指している。合理的なカタチで見えるようにすることは、組織経営の観点からも人的資源管理の観点からも重要である。民間企業では、利益を上げるための戦略が日常的な重点であるのに対して、学校法人には、教員や事務職員を通して学生や生徒をいかに社会に役立つ人間として育てていくかという目的が一義的に存在する。そのための組織とその中で働く人たちの動機づけをどのように保つか、本来のガバナンスである。これはどの組織のレベルでも言えることであり、現場には現場のガバナンス、経営層には経営層のガバナンスのレベルがある。

一方で、そうしたガバナンスを意識させることなく、教育したり業務をしたり学んだりでき

るという環境が本来的には望ましい。しかし、この点において、経営的な改善と教育的な改革との間の齟齬が少しずつ出てきたり溝がつけられたりする潜在性がある。だからこそ多面的に物事を見て考える想像性と創造性が必要となり、主体的に考えて行動することが求められると言える。組織と組織、人と人がそれぞれで中心化することなく、互いに囲い込むことなく、多様な視点をもって外に拓いていく態度と価値観をもって物事や人に臨むことが望ましい。

盲目的なのかもしれないが、暗黙的に以心伝心「風」のやり取りで物事が進められてしまうことなく、科学的合理性や可視化による透明性をもう少し意識してもよいのではないかと思う。顕在的で意図的な組織経営を行う、合理的で有用な支援業務を行う、言語的で流暢性のある教育を行う、そして主体的で内発的な学びを行う、という一連の学校法人での活動の流れが、社会や地域や家庭を含めたステークホルダーとの関係性を強めていくことになるはずである。

6 おわりに

本稿では、よい学びとよい教育はどのようにすれば結びつけられるかに焦点を当てて議論が

進められてきた。たとえミドルの立場であっても、具体的な教育場面や状況を想定しながら議論を重ねてきたことは、学生の学びや成長に対する興味関心の強い表れであるとも言える。多くの教員や職員にもそうあってほしいと思いつつも、ミドルの立場から発信し続けることの難しさも実感としてある。その点、学長をはじめとする大学執行部や理事長ら学校法人の主体性や能動性は、高等教育の場においても大きな働きをする。特に、大学という場のあり方を「人間する」場の機会として捉え、互いに学び合い成長することに意識を向けるかどうかは、学校法人で働く人間としての矜持そのものと言える。本座談会での議論が、学校法人が直面する複雑な課題に対し、現場と経営の双方に新たな対話のきっかけを提供し、より良い学びと教育の結合に向けた一歩となることを期待する⁽⁴⁵⁾。

本座談会に至るまで、学部や学科の運営に協同的に参画いただいた教員や職員の方々、また授業やゼミで様々なことを教えてくれた学生たち、そしてその支援や協力を頂戴した家庭や地域や社会の皆さまに謝意を表す。

注

(1) 要旨：本文について Google Gemini 3 高速モードでの要約を元に編集したものを示す。

- ◇ 各学部におけるミドルマネジメント層による現状の振り返りと課題
筆者ら各学部の学部長が、この数年間の管理・教育・研究面での取り組みを振り返った。
 - ・経済学部：教員採用の困難さが大きな課題として挙げられた。他大学への転出は本学が研究者のキャリアの土台となっている証左である一方、補充の応募者が減少しており、大学の方針とのミスマッチも生じている。また、経済学科（個人事業主的・研究者肌）と経営学科（団結力が強く実務重視）の気風の差が明確化しており、経営学科の学部化に向けた動きも議論されている。
 - ・人間科学部：スポーツ学科とこども学科の分化が進み、学部としてのアイデンティティが希薄化している現状がある。一方で、学生募集は順調だが、教員と学生の距離が近すぎる「手厚すぎる指導」が、学生の自律性やマナー面での課題を生んでいる可能性も指摘された。
 - ・人文学部：2016年の設置以来、英語で専門科目を教えるEMIを推進してきたが、コロナ禍による留学の中断や、地域ニーズとの乖離から、学科分割（国際文化と国際英語）という大きな転換期を迎えた。募集面での苦労はあるものの、改めて「国際」の意味を問い直す時期に来ている。

◇ 「国際」の再定義と「脱中心化」

人文学部の改革に関連して、「国際」という言葉の本質について議論された。従来の「西洋を特別視するような国際化」からの脱却を訴え、「脱中心化」や「脱ローカル化」という言葉によって議論

された。これは、自国や特定の価値観を世界の中心に置くのではなく、多様な視点から物事を捉える姿勢を指す。また、西田幾多郎の「わたしが井戸を見、井戸がわたしを見ている」という主客未分の視点も引き合いに出され、相手の視点から自分を捉え直す「メタ認知」の重要性が強調された。

◇ リメディアル教育への批判的視点

学生の基礎学力の低下、特に世界史や地理に関する知識の欠如について具体的な懸念が示された。歴史的背景を知らなければ文化を深く理解することは難しく、創造のための「材料（知識のピース）」が不足しているという指摘である。しかし、これに対する解決策としての「リメディアル教育」や「初年次教育」を安易に強化することには、強い疑問が呈された。議論に挙げられた観点別の例示は次の通りである。

- 動機づけの欠如：学修者が必要性を感じていない段階で具体的な使い方や体裁、基礎知識を教えても定着しない。
 - 自尊心への配慮：大学生に対して中学レベルの復習を強いることは、人としてのプライドを傷つけ、学習意欲を削ぐ可能性がある。
 - 教員側の自己満足：「教えた」という既成事実を作るだけの実質性のない教育になりかねない。
- また、全学で一律の基礎科目を作るのではなく、各科目の教員がそれぞれの文脈の中で、必要な知識を「知らせる（0を1にする）」工夫をすべきだとの提案もされた。

◇ 「人間する」ための実践としての学びと身体性

座談会の後半では、具体的な教育実践のあり方が議論された。共通するのは、理論や概念の詰め込みではなく、「身体を動かし、自ら発見する」プロセスの重視である。議論で挙げられた例示は次の通りである。

- 新聞制作を通じた学び：スポーツ学科で行っている「新聞作り」の課題が紹介された。学生が自ら取材し、情報を取捨選択してレイアウトまで考えるプロセスは、ICTや論理的思考を総合的に使う「大変だが楽しい」課題であり、学生の主体性を引き出す。
- 観察と取材のゼミ：学内にあるモノや空間の不満点を学生自身に見つけに行かせるフィールドワークが紹介された。日常生活に注意を向け、観察し、分析し、情報共有して報告書にまとめるというプロセスを通じて、「教養力」の具現化を図っている。

◇ 組織運営の在り方と今後の構造改革

座談会の終盤では、大学組織のマネジメントと教員の自律性についても議論が及んだ。近年、大学が企業のように「組織化」され、教員が管理の対象となる傾向がある。しかし、大学は本来、教員一人ひとりの個性が尊重され、自由な発想が奨励される場所である。過度な標準化を避け、組織の中に「ゆらぎ」や「遊び」を維持することの重要性が説かれた。

◇ 今後の展望

座談会全体を通じて、大学教育は単なる知識の伝達（passiveな教育）ではなく、学生や教職員が自発的に学び、自己を変革していく（transformativeな）場であるほうがよいという共通認識が示された。「国際」であれ「人間科学」であれ、重要なのは「メタ認知」を備え、自ら問いを立てる力を養うことである。さらに、ミドルマネジメント層は、学部の壁を超えた「共闘」関係を維持しつつ、学生が社会に出た際に「具体的な実務ができ、かつ批判的すぎず主体的に動ける」人間として成長できるよう、各現場での教育を磨き続ける意志が共有された。

- (2) 佐々木康成, 山田範子, 森延江 (2025) 大学の授業で人間について語る—Uniquely Humanとはなにか?— 金沢星稜大学人文学研究, 第9巻第1号, pp.119-136.
- (3) 大学のミドルマネジメントというのは、大学執行部や所属の学校法人などの経営層と、現場の教員や職員との間を往き来する機能的な存在としてあることが求められる。トップダウンによる意志決定の速さとボトムアップによる現場の意見を聞いて動機づけを維持することが重要である反面、組織全体の動きの弱体化や施策の中庸化などがそれぞれ問題となる場合もある。その点から言えば、ミドルマネジメント層が主体的に上下に対して企画、提案、実行、評価、批判、展望などを行っていることは、いわゆるミドルアップダウン・マネジメントの観点（野中郁次郎・竹内弘高、梅本勝博（訳）（2020）. 知識創造企業（新装版）東洋経済新報社）からも有用であると考えられる（小林浩（2021）ミドルマネジメントに求められる「新たな課題への挑戦」と「企画構想力」、リクルートカレッジマネジメント226, https://souken.shingakunet.com/publication/assets/2021_RCM226_04.pdf）。
- (4) 田中富士美は4年間副学長として、また、最初の2年は人文学部長兼務であった。曾我千春は経済学部長として4年、櫻井貴志は人間科学部長として4年、菊池嘉晃は人文学部長として2年、佐々木康成は教養教育部長として8年、それぞれの学部等のミドルマネジメントを預かってきた。このメンバは、学内の複数の会議で月に7-9回程度で顔を合わせ、教学、入試戦略、広報、自己点検評価、人事、FDなどに関して学部間や大学内での調整・意見交換・折衝・手配などを行ってきた。その際、学内のグループウェアのスペース機能をフル活用し、情報共有や調整等の効率化を図ってきた。もちろん必然的に飲み

会や食事会も相当回数蓄積されている。

- (5) 日程調整は難航したが、結果として、2025年11月13日18時から4時間近くにわたって行われた。
- (6) 筆者の一人である佐々木の行きつけの理髪店のマスターとの交流を例に挙げながら、そのマスターが東京での修行経験があり、「こうせなあかん」という考えがなく自由度の幅が広い点に互いに共感している、店でのいつもの話も金沢ローカルに留まらず「開放されている」という感じが理想的な創造性のある方だと思っている。とは言え、自由な発想を持ちながらも、手続きを重んじ細かく批判的に指摘するといった「真面目さ」も互いに持ち合わせていることも、マスターの言う「ソリが合う」というところがあり、これまでのこの対談シリーズに通じるところがあると言える事例として紹介された。
- (7) 『金沢星稜大学人文学研究』第1巻から第9巻までの「シリーズ対談：教養教育とその周辺」(全10回)からの各タイトルと内容を振り返り、各回のテーマや論点として、教養、専門性、教育デザイン、常識と創造性、大学教員の役割といった多岐にわたるテーマを以下のような概要で紹介された。

#1. 教養での学びとそのデザインー常識と創造性のはざまー

人文学部設立直前、初めての科目を担当するに際して、科目のデザインについて悩み始めた時期の対談である。論点として、常識と創造性の中で揺れる学びのデザインについて議論し、特に、当初は科目のデザインが話題であった。

#2. 習いを超え、学びを超え、創造的な人に成るーことばと思考の捉え方ー

高校生までの「習う」と大学生からの「学ぶ」という使い分けを行う方がよいという提起があり、言葉や思考を通じて「創造的」になるプロセスについて議論された。

#3. ことばの育て方と創造性ー異質なことばの受容と運用を探るー

前回の「言葉の話」を受けて、言葉の育て方の重要性について議論された。教員が使いがちな抽象的なカテゴリー的理解(意味や概念)だけでなく、学生が理解するために必要な例示的理解(具体例や実体)に落とし込むことの重要性が説かれ、言葉の育て方と実体の理解について議論された。特に、菱田春草の「黒き猫」の絵を巡る議論から、観念としての猫(抽象)と実体としての猫(具体)の区別が話を進める上で不可欠となり、またこれが教養力と専門力の現れであるという見解も見られた。

#4. 型にはめる教育と冒険させる教育ー大学教員という仕事のなかでできることー

大学教員は教育の訓練を受けていないことがほとんどであるという点から、大学教員としてできることが探られた。常識と創造性に置き換えられる「型にはめる教育」と「冒険させる教育」の両方が必要であるという議論から、関連概念として、守破離(師匠について守り、破り、離れる)の考え方が提示され、学生と教員の関係もそうあるとよいとの見解に至る。また別論点として、学生がよく使う「成長」という言葉は何を示すかについても議論された。

#5. 総合性指向で「教養力」を培うーローカル最適化からの解放に向けてー

地方(ローカル、局所)から出たくて大学や日本に来たという共通の経験から、ローカル最適化から解放されるにはどうしたらいいかについて、脱ローカル化の思考が必要であるとの議論となった。2019年当時、1年次基礎ゼミナールのあり方や英語の単位数変更に関する改革の議論が進行中であったことと関連づけられ、単にローカル(あるいは自己)に最適化しても意味がないという認識のもと、結果として学生のスイッチをどう入れるかという課題にもなった。

#6. 学びにおける身体感覚の効用ースポーツと教養の接点を探るー

スポーツと教養の親和性(身体性や総合的思考など)について、オリンピックをゲストとして招いて議論が展開された。オリンピックレベルの人々は、言葉を尽くさなくても通じるレベル感で指導が可能だが、ローカルでは言葉を尽くす必要があることが挙げられ、また、教養はプロセス重視の一方、スポーツは成果重視であるという指摘があった。スポーツでは、単に「いい経験をした」で終わるのではなく、何がどうなったかという結果(成果)が述べられないという立場である。

#7. 「人間する」ための「教養力」ー人工知能と経済合理性の時代に大学教育が果たす役割ー

当時話題になり始めていた人工知能(AI)と人間との違いが議論のきっかけとなり、重要な概念として人間であるための「教養力」の必要性が説かれた。ゲストのアメリカでの経験から、脱ローカル化の思考が必要とされ、これが脱中心化と同義であり、大学の一つの機能であるという認識があることから、専門科目だけでは中心化するだけであり、脱中心化のための施策が必要との見解が見られた。

#8. 多面性を保ちながら教えるー専門性と教養教育の間でー

教員が持つべき多面性(専門/教養、プロセス/成果、理学的思考/工学的思考など)が議論され、多様な観点での二面性が多次元化していること、そして結局は総合性が必要であるとの認識が見られた。

#9. 大学という場で学「術」を使う人たち—大学教員どうしの共創的自己分析—

これまでのシリーズの議論を踏まえて大学教員のあり方が議論された。教員の分類としての「戦士型」(知識や方法を徹底的に教える人)、「僧侶型」(説くタイプの人)、「魔術師型」(創造性を重視する人)のようなタイプが言及され、大学の教員は学術の「術」について、専門的な術、教え方の術、信頼や創造の術など、多様かつ自由に使えることが重要であるとされた。自由な発想を持ちながらも「真面目な教員」として手続きや細部にこだわる側面も創造性には必要であると再確認された。

#10. 大学の授業で人間について語る—Uniquely Humanとはなにか?—

教養教育科目「教養の門」のなかでのオンデマンド教材が起こされ、子どもの認知と視点の入れ替え、人間になるにつれて刈り込まれる人間らしさ、おもしろいと人間らしさ、人間を取り戻す、といった内容について議論されている。

- (8) 本学では、学部や学科の創設された時系列の通りに物事を表す序列が決まっていることが多い。会議等での発言順序も同様である。
- (9) 2024年度に経済学部地域システム学科が設置され、経済学科と経営学科から一部の教員が異動した。
- (10) とは言え、本学の教養教育科目の授業には、マス教育というよりも個を重視した一般科目の担当者も少なからず存在する。
- (11) 経済学部の卒業に係る共通教育科目群の要件は、2020年度から52単位から42単位へ、また2024年度から40単位へと変更している。
- (12) 経済学部2年次配当の専門教育科目であるが、以前は共通教育科目の「基礎ゼミナールⅢ、Ⅳ」(4単位)として開講されていた。
- (13) 佐々木担当の科目の多くでは、授業後毎回「コメントタイム」と称して、各回の授業で印象に残ったトピックや内容あるいは質問や相談などを書かせて、すべてにフィードバックをしたものを全員分全員にLMSから公開するようにしている。
- (14) クラス間の平等性や公平性に言及する教員が一定数いるが、高等教育でそれが本質的な議論かどうか、疑問である。また、給与と科目担当負担との関係に強く言及されるような外発的な動機づけで教育に臨むことは、学校法人の職員であることに鑑みて、理想的ではない印象を受ける。
- (15) Project-Based Learning (プロジェクト型学習) あるいはProblem-Based Learning (課題解決型学習) の略で、問題解決型学習の一種である。実社会に近い課題やテーマに対して学生が主体的にリサーチしたり、仮説立案したり、解決策を提案したりして、その一連のプロセスを体験する実践的な学習方法である。知識のインプットだけでなく、思考力・行動力・協働力のような社会で求められる能力を総合的に育むことを目的としている。
- (16) 本学の各学部等のDP (Diploma Policy) については、本学ホームページ内の各学部紹介に載せてある。<https://www.seiryo-u.ac.jp/u/education/>
- (17) English Medium Instruction の略で、英語を媒介言語として専門科目を教授・学修する高等教育上の教育実践を指す。
- (18) 国際交流センター、キャリアセンター、教職支援センター、SDGs産学地域連携センター、総合情報センターなど附属機関としてのセンターが、学生や教員の学びや教育に関する支援を行う場として本学には置かれている。
- (19) 航空用語で、着陸してすぐに再加速して離陸する訓練のことを指す。
- (20) 人文学部の教員の研究室と学生たちが学ぶ教室があり、2016年度の人文学部設置の際に新たに竣工した建物の名称である。Global Commons 館の略称と言える。
- (21) 2024年1月1日付の本学学長から発出の教育ビジョンとして、文理を超えた多様な学びと成長を実現するための変革的な教育のあり方を指す。実際には教育だけでなく、教員等の人事、組織や業務等の改革などにも当てはめていける考え方であり、実際、筆者らミドルの間ではかなり意識されながら管理運営に当てはめてきた。
- (22) 2024年度からの教養教育科目の新カリキュラムを教養教育部から提案する際に佐々木から発案した以下の10個のコンピテンシーの総体のことを指す。
 - 1) 教養的思考 2) システムの指向 3) 構造と機能の理解 4) 合理性と効率の追究 5) 協同性への親和 6) 多様な視点と関心 7) 異文化間の理解 8) 関係性の把握 9) 総合性志向 10) 脱中心化
- (23) 哲学者の西田幾多郎の出身地であるかほく市にある石川県西田幾多郎記念館は、1968年に西田の業績を後世に長く顕彰するために建設された当時の宇ノ気町立西田記念館を前身とする。この座談の前の週にたまたま訪れていた。
- (24) 西田幾多郎(1911)『善の研究』弘道館 第十一章 善行為の動機より「物が我を動かしたのもよし、我が物を動かしたのもよい。雪舟が自然を描いたのもよし、自然が雪舟を通して自己を描いたものでもよい。元来物と我と区別のあるのではない、客観世界は自己の反影といい得るように自己は客観

世界の反影である。我が見る世界を離れて我はない。」青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp/cards/000182/card946.html>

- (25) 最近では、夏王朝が最初に来て覚えている学生が見られるようになった。
- (26) English for Academic Purposesの略で、大学・大学院教育において英語を媒介として学術的知識について理解・構築・発信する能力を体系的に育成するための英語教育を指す。
- (27) On-the-Job Trainingの略で、座学ではなく、実際の現場（職場）での経験を通してスキルや知識を習得させる教育方法である。現場の状況に即した実践的なスキルを習得できるため、企業や組織で取り入れているところも多い。
- (28) 感情や直感ではなく、知識や理屈としてどのように捉えるか、という観点を指す。特に心理学では、heartの心理学ではなくmindの心理学というのが、本来の心理学的な意味合いである。
- (29) 1年次必修科目の「教養ゼミナール」では、共通シラバスにあるリーディングの基礎、ライティングの基礎、プレゼンテーション、ディスカッションの要素を入れつつも、各学期（クォータ制）の担当者の専門分野周辺を使った自由度の高い授業運営が任されている。一方で、各担当者間での受講生への課題負荷のバラツキを低減するため、各学期に「共通タスク」と称する課題を設定して、担当者が個別に課す課題負荷の大小に合わせて共通タスクで帳尻を合わせてもらう工夫をしている。したがって、共通タスクの代替可能な課題がある場合には代替できるように教材の設計がなされている。
- (30) 本学の教養教育科目は週1回のクォータ制で開講されている科目が多い。「教養ゼミナール」も1年次の第1クォータから第4クォータまで4名の異なる教員がそれぞれのクォータを担当する形式を取っている。
- (31) 7回の内の後半3回分のゼミ活動の流れは次の通りである。
設定： みんなは、商社勤務で、取引メーカーの製品に対するカスタマーからのクレーム対応部署のメンバです。複数のカスタマーからの取り扱い製品へのクレーム管理文書を〇〇課長が紛失しました。温厚な◎◎部長からの指示で現地調査を進め、当該文書の再構成を行うことになりました。（〇〇には当時の学科長名、◎◎には当時の学部長名）
問題： 以下の推論を行いながら、現地（学内の特定のエリアにあるモノや空間）でのクレームの具体的な事例を抽出してください。
あ）クレーム内容の具体例の抽出
い）クレーマーの具体的な属性
う）調査をもとにした問題の論理的な導出（なぜ、どのように、を考える）
調査時間： 45分間程度で教室へもどってくる。
注意事項： くれぐれも周囲の人々に不便と迷惑にならないように注意する。
探索場所割当： ◎班長、○副班長、および班員2、3名で構成。
ホーム活動（エキスパート活動）によるまとめ作業： 取材から戻ってきたら班員でディスカッションして、次回行う他班との情報共有に向けた準備をする。共有資料の作成方法や共有の仕方などについて、他班への情報共有のためにどのようなことができるか、検討する（Microsoft365のOneDriveとPowerPointを利用して互いに情報共有できるかやってみる）。
ジグソー法による他班への情報共有： グループ活動。
ホームでの反省会： グループ活動。
クレーム管理文書の再構成： 個人でのレポート作成。
- (32) 佐々木の専門は実験心理学で、本学では心理学を担当している。
- (33) この筆者らのメンバで飲み会をやると、たいがい二次会までいくことになるが、そこで最も教育について流暢に話すのは櫻井であり、他のメンバは聞き入ることが多い。
- (34) 本学の自己点検評価部会もこの筆者らのメンバで構成されているが、その中で議論されたいわゆる「授業評価アンケート」は、「コースリフレクション」という名称に変更して「担当者の授業」という位置づけから、「学生の履修する科目」という位置づけを前面に出して、かつ、学生が授業だけでなくその科目全体を振り返るという意味づけにしたほうがよいという議論になってきている。
- (35) 間主観性については本文参照。疑似環境とは、人間が自分の頭の中に描いている、環境に対するイメージのことで、現実の環境の正確な反映ではない。アメリカのジャーナリスト、ウォルター・リップマンが著作『世論』（1922年）の中で用いたことで知られるようになった（『社会学小辞典』有斐閣、2015、p.101）。
- (36) 本学の教員数は助手も入れておおよそ100人弱である。
- (37) ここまでですでに2時間以上が経過していた。
- (38) 教養教育科目の3年次配当科目として開設されている演習・実習系の科目で、教養教育部教員が担当する1単位のクォータ科目である。
- (39) 評価に際して、一つの課題を課してルーブリックに従った方法を採用してSABCD評価を行うことは多い

かもしれないが、一方で、レベル別の課題を複数課しておいて（例えば、容易な順にC課題、B課題、A課題、S課題とする）、それぞれの課題の下位レベルから順にどこまで遂行できたかに依って評価を行うという方法もあってよい（このとき、下位レベルの課題が合格点でなければ上位レベルの課題は採点しない、もしくは減点するものとする）。特に、必修科目の場合には、成果のパラツキが大きくなったり能力別のクラス分けを行ったりすることが多いので、その科目にどのように関与してプロセスを享受したかという点で不平等や不公平性が指摘されることもあるため、複数のレベル別（量的差異も含む）課題による評価が適切な場合もあると考える。

- (40) 実際、たまたま経済学部の卒業研究報告を聞きにいったとき、研究の全体的な流れや概要よりも、その中で方法として行われたアンケート調査の具体的な内容をもっと報告してほしかったという場面が多かった。
- (41) スポーツティーチング、スポーツコーチング、スポーツマネジメントの3分野のことである。
- (42) **Institutional Research**の略で、大学の学生・教育・研究・経営などに関するデータを収集・分析し、教育の質向上や大学の意思決定を支援するための組織的な活動を指す。IRに関する理解があまりない教員や職員が少なからずいることは否めないが、Investor Relationsとの混同、組織経営や改善への無関心、教育効果の可視化に対する不安なども要因として考えられる。勤と経験だけで教壇に立てる時代ではなく、エビデンスに基づいた教育改善、すなわち教学マネジメントが義務化されている時代であることを全学的に理解してもらいたい。
- (43) 大学改革支援・学位授与機構の「大学・高専機能強化支援事業」の文脈で申請された新領域学部構想を指す。<https://www.niad.ac.jp/media-download/7626/f241e102f3e2e12c/>
- (44) 実際には、中略しなければならぬ発言が多発したことも対話形式で記述できない要因である。
- (45) 本稿に対して意見、質問、相談などのある場合は、筆者らのメールアドレスへ送信ください。筆者らより返信します。